

はじめに

今の時代にあって、一生、犬糸状虫研究を続けることが出来たのは幸せでした。これも恩師久米清治先生との出会いがあったればこそと思っています。久米先生の研究室に加えていただき、先生が定年退官されるまでの8年間に、大学研究者としての基礎をご教授していただきました。先生の犬糸状虫研究に掛ける熱くて静かな情熱と真摯な生き方を8年間もおそばで拝見し拝聴してきたことが、私も一生犬糸状虫研究者で生きていこうと決定付けました。

恩師久米清治先生が東京大学の板垣四郎先生の研究室で研究者生活を始められた20代30代の頃は、戦争と戦後の荒廃した時代でした。それに比べれば私の若い時代は学生運動激烈を極め、ヒッピー族、しらけの時代と世相は慌しかった半面、高度成長期の時代で、自分の将来に夢を描ける時代であり、その分恵まれた時代だったといえます。助手の時代は久米先生から、若いうちしか研究に集中できないからともかくも研究に集中しなさいと何度も言われました。また、こんなことも言われました。研究とは恋愛と同じです。恋愛すれば寝ても覚めても相手のことを想うものです。そのように研究も寝ても覚めても問題解決に思いつめるようになるくらいじゃないといけません、と。その他にも、研究というものは何年かかってもじっくり取り組むことが大事です。あせってはいけません。若いうちはあれこれいろいろなことに手を染めなくなるものですが、得意になってあれこれとんでも手を付けていると結局は研究が荒れてしまい、たいした成果も上がらないことになってしまいますから気をつけなくてはなりません、とも。

私の研究成果はとても久米先生のそれには及びませんが、振り返って見ますと、“やればそれなりの研究成果が出てくる”といった研究課題にはあまり取り組まなかったように思います。むしろ“やってみなければどういう結果が出てくるか分からない”課題に取り組んできたように感じています。もちろん意識してそうしてきたものではありませんが。私の研究は小さなことばかりでしたが、“初めて明らかにした研究”が少なくないように自負しています。

停年は社会的のみならず生理的にも丁度ほどよいひと区切りの機会です。この機会に、潔く頭を切り替えて、早く未来志向に自分を向けて次の人生を歩んで行きたいと思っています。どのような人生が待っているのか分かりませんが、皆様どうぞ今後ともよろしく願い申し上げます。

また、この40年間の大学人生活を支えてくれた私の家族に感謝いたします。

末筆になりましたが、皆様の末永いご健康とご多幸をお祈り申し上げまして定年退職のご挨拶に代えさせていただきます。

平成21(2009)年4月

早崎 峯 夫

目次

はじめに

1	定年退職に思う	1
2	臨床寄生虫学の発展に思う	4
3	寄生虫学と寄生虫病学	7
4	カルチャーショックー私の場合ー	9
5	わが国の人のフィラリア寄生虫症	11
6	日本のエキノコックス症に思う	13
7	地球温暖化に思う	15
8	栄養文化学考	17
9	動物慰霊祭に思う	19
10	動物とともに生きる楽しい暮らし	21
11	動物介在活動に思う	23
12	略歴と業績	25

1 定年退職に思う

最近申請書を出して研究費を競争的に獲得する制度が徹底してきましたから、私のような地味な研究はなかなか採用されませんでした。そういう中で私の研究は犬糸状虫研究が持ついろいろな研究テーマの中でも研究費のかからない研究テーマにシフトしていきました。研究テーマにも流行があって、犬糸状虫研究は今では昔の華やかにスポットライトを浴びた時代と違って、地味なテーマになりました。最も、私はそのほうが周りの雑音に煽られず、未解決で、より本質的な研究課題をテーマにすえてじっくりと取り組めてありがたかったのです。この4-5年は特にミクロフィラリアの定期出現性 **periodicity** に集中しています。このテーマは、あまり研究費を必要としない代わりに、いまだに世界の謎で、既報の研究は参考にならず、すべて自分の研究発想と工夫が頼りでこれはこれでなかなか苦しいものです。しかし、それはそれで停年を前にして、再び若き日に似た研究への情熱がよみがえってきて楽しいものでもありました。いやもしかしたら、老いの一徹ではないですが、私自身あの頃以上に犬糸状虫研究に情熱を注いでいるかもしれません。

60歳にして狂犬病ワクチンを発明した、かのルイ・パストゥールはその昔「科学に国境はない」といいました。崇高な哲学的思考に基づく有名な言葉で世界中の人が感動して今でも引き合いに出されます。もっとも、いまでは誰が言ったのかはよく分からずにこの言葉を引き合いに出している人の方がほとんどだろうと思いますが。皆さんは、この言葉に“続き”があるのをご存知でしょうか。その続きとともにこの言葉はワンセットなのです。その続きと言うのは、「しかし、科学者には祖国がある」と言ったのです。皆さんも両方を続けていってみてください。私はこの“続き”の方が好きなのです。実に人間くさいと言いますか人間らしいと思うのです。これに比べますと、かつて人類で始めてエベレスト（チョモランマ）登頂に成功した、イギリスのエドモンド・ヒラリー卿は、なぜエベレストに挑戦したのかと聞かれ「そこに山があったからだ」と答えました。これもあまりにも有名な言葉です。でも、英国流のウィットとなんでしょうが、やはりちょっとキザだなという感は拭えません。ルイ・パストゥールは1800年代の後半を生きてあともう数年で20世紀に入るといって1895年に亡くなった人です。その頃のヨーロッパは各国が競い合っていた時代ですから、祖国愛を表明したでしょう。

科学の研究者には何のために研究を行っているのかという哲学的エネルギーが必要なのです。それなくして、研究者として長続きはしないものです。広い意味で結局は家族愛だとか人類愛だとか掛け値なしで全エネルギーをつぎ込める高いレベルの理屈がないといくつになってもはつらつとして研究するなどといったことは出来そうではなかなか出来るものではありません。教授になりたいからとか何か長のつく地位に昇りたいからなどといった低いレベルの理屈ではいずれは落下していくでしょう。

ところで、長年研究をやってきましたと、研究というものは良いテーマに出会うのではなく良いテーマになるように育てるものだということが分かってきました。よく研究中に試薬の量を多く入れ間違ったとか、少なく入れ間違ったことから思わぬ発見につながったなどとノーベル賞をとった人は楽しそうに話していますが、普通凡人はそういう時、次は失敗しないようにと自分を戒めるほうに頭が働らいてしまいます。しかし、やはり天才は違うのですね。そういった失敗にこだわらずその失敗の結果何かいつもと違う結果が生じたのかと自分の研究を他人事のような客観的な目でいつも柔軟に見る事が出来るところが天才の天才たる所以のような気がします。

なかなか凡人の及ばないところです。

とはいえ、凡人の私ですが、長いこと犬糸状虫を敵だとばかりに一生懸命戦ってきましたが、研究すればするほど犬糸状虫は一生懸命生き抜いていることが分かってきて、今ではとてもいとおしく思え、戦うというよりもっと知りたくて研究するようになっていきます。私たちは、犬糸状虫は犬科動物にもっとも適応していると思っていますが、そうではなく草食動物も含めて哺乳類に広く検出されているのです。さらに驚くことに、最近秋田県の動物園のペンギンからも見つかりました。たとえほとんどが偶発感染（事故的に感染できてしまったということ）だとしても、ウマ、シカなどの草食動物を含めた哺乳類に広く寄生することが出来る上に、鳥類にも感染しています。これは言い換えれば、犬糸状虫はいまなお、種族の保存のために好適宿主を捜して進化をしているということではないかと思っています。実に“けなげ”です。

ところで、私はフランス・パストゥール研究所に留学することが出来ました。ルイ・パストゥールが生前に設立したパストゥール研究所は、パリと北フランスの大都市リール市の2ヶ所だけで、それ以外のリヨン・パストゥール研究所や昔のフランスの植民地だった国々に設立された世界各地のパストゥール研究所は、彼の没後にフランス政府が国策の一環としてルイ・パストゥールの弟子たちとともに創り上げていったものです。リール・パストゥール研究所は BCG を発明したところとして世界に知れ渡っています。実はフィラリア研究ではパリよりもリールの方が有名でしたのでリールを選びました。

私のあてがわれた研究課題はヒトのフィラリア種である回旋糸状虫 *Onchocerca volvulus* の抗イディオ型モノクロナル抗体の作製というものでした。つまりオンコセルカ・フィラリアの抗原決定基分子と分子構造的に同一の蛋白分子をハイブリドーマから作ることになりました。その特異性が高ければ、それはそのままフィラリア寄生虫ワクチン候補物質になります。あとから分かったことでしたが、その研究課題は難しくて成果が上がりえずに終わる可能性が高いので所員の誰も引き受け手が無く棚上げになっていた課題でした。それと知らずに引き受けたというわけでした。そのようなわけで、毎日毎日がハイブリドーマの作製と ^{125}I や ^{131}I を使ったラジオイムノアッセイの繰り返しで、はじめの半年間は作っても作っても思うようなモノクロナル抗体

が作れず、このまま成果無しで尻尾を巻いて日本へ逃げ帰ることになるのだろうかとも実に不安でしたが、後半やっと作り出すことが出来て、ほっと一安心といったところでした。その翌々年に論文に仕上げる事が出来ました。

その後のわが国の大学改革により、大学の法人化と、それに伴う競争的研究費（文部省科学研究費交付金制度など）の獲得を基本とした大学研究費の個人別支給制度の確立、研究室教員組織の従来型縦列制度から横列の研究者個人独立制度への変革などにより、私の研究環境も変わらざるを得ませんでした。要するに以前の助教授・助手は“部下”では無くなり、教授といえども基本的には何をするにも自分ひとりの力でこなしていかななくてはならなくなりました。実験するのも一人、英文の原著論文を書くのも一人、ましてや今では普通になった電子投稿方式も自分で一つひとつ覚えていかななくてはなりません。学術雑誌の投稿案内の英文を読み、それに従って原稿の投稿手続きを進めていくだけでも1日がかかります。若い先生に聴いてしまえば楽だよ頭の中で誰かがささやきますが、こちらにもささやかな見栄がありますから何とか自分の力で解決しようと踏ん張るわけですが、いかんせん、それを説明しているホームページの英文自体があたかも分野の違った論文を辞書片手に読むのと同じくらいに手ごわく、書かれてある通りにやっているはずなのになかなか先にすすまず、脳みそが解けるのではないかと思うほどへとへとに疲れてしまい、その日は目的達成できずに帰宅して、翌日見栄も外聞もかなぐり捨てて若い先生に頭を下げて教えてもらおうなどということもありました。われながら、自分の生理活性が峠を越えてしまい、あとは下るばかりなのを感じざるを得ません。それでもしぶとく1年に1編は英文原著論文を投稿して、何とか大学教授の最低限の責任は果たそうとあがいている自分に気がきます。

もともと、いったん試験管を握らなくなったり、筆を置いて自分で英文原稿を書くことをやめれば、実験作業の感や英文原著論文執筆のエネルギーはもうもとのレベルには戻らないものです。それを考えると、一人でやらざるを得なくなったからこそ、停年間近になっても試験管を振ったりパソコンを打ったりして生涯現役研究者として第一線で働いているのだらうと思うと、それはそれで幸せなことだらうと思います。

2 臨床寄生虫学の発展に思う

今、どの研究分野も“ジーンヘジーンへと草木もなびいている”のは、ジーンを研究手法の中心にすえると研究費がとりやすくなるからであり、今の時代致し方ないことかもしれないが、反面どの科学分野もジーン神話にかぶれてしまったかと残念な気もする。確かにジーンは現代生命科学の流行であるが、かつてモノクロ抗体神話やインターフェロン神話がそうであったように、一通りの研究アイデアに手をつけてしまうと「何に役立つ」、「何には役立たない」ことがおおよそハッキリしてしまい、夢の抗体、夢の治療薬といわれていた初めの期待ほどの研究成果は得られず、せいぜい新診断法開発や腫瘍など一部の疾患の治療にそれなりの成果をもたらしたことでブームが終わってしまったように、このジーン探しも浜辺の大量の砂の中から1粒の砂粒のようなダイヤを探すごとく、河川の土砂からの砂金探しや水晶探しよりももっと確率の低い宝物探しのような困難さはあるものの、それもいずれは克服されてもっと容易にジーン研究が出来るようになっていろいろ分かってきたときには、モノクロ抗体研究と同じような道を辿ることになるかもしれない。

診断目的にせよ治療目的にせよ候補となるジーン候補が *in vitro* で見つかったとき、この研究のゴールとは、同一疾病の罹患動物に同一の遺伝子分画が存在することを証明して、その遺伝子が確かに疾病原因の蛋白をコードしている遺伝子であることを *in vivo* で証明して、さらにそれを阻止すると発病したり治癒することを証明するところにある。こうしてはじめて科学的に証明できたことになる。つまり、最後はその蛋白質の機能として証明しなければ確かなことは分からないということに尽きる。

まさに Koch の 3 原則と同じである。当時の医学でもそうであったが、第 2 原則までは比較的やすくだどり着く（あるいは、研究者はたどり着けたと主張する）が第 3 法則を突破できずに、仮説の段階で挫折することが多い。ヒトとサルは遺伝子の質も量も格段に違うとの期待のもとに世界中に研究者によるアクティブな連携研究が行われたが、全部を解読してみたら毛 3 本ほどの違いしかなかったという冗談ともつかぬ結論で幕が閉じ、笑うに笑えなかったのはついこの間のことである。

科学研究の世界でも研究テーマにブームがあるが、ブームとは恐ろしいものでブームに流されやすいものである。ブームに流されることなく、自分の研究的視点を大切にして常にじっくりと実験に取り掛かることが、自分の研究が荒れないようにするために重要である。夢中で実験をしていると近視眼的あるいは視野狭窄的になり、知らず知らずにこれに飛びつきあれにも飛びついてしまう。その結果、研究が荒れてしまうことに気付かないことになる。だからこそ、わき目も振らずに研究するのである。しかし、そうは言っても、ときどき周りもよく見渡しながら自分の研究の座標軸がぶれていないか、目的とする方向へ寄り道せずに向かっているか、非能率で無駄なこと

をしていないか自ら検証することが重要である。つまり、世の中はしばしば逆説的である。逆の方向からも物事を見つめられなければ、二兎どころか一兎をも失うことになる。一流といわれる研究者を見ていると、結構休み休み実験を続けていて、休暇も上手にとっていて、自分の研究を客観的にみることが出来る環境を整えながら研究生を送っていることに気付く。

寄生虫研究の話に戻る。上述の Koch の第 2 原則までは、寄生虫生物学の範囲である。第 3 法則はまさに臨床寄生虫学である。第 3 法則を突破できないで第 2 法則にとどまるならばそれはセオリーにすぎず、セオリーは研究の方向が目的の方向からはずれてさえいなければたどり着けるが科学の扉は開かないかもしれない。しかし、科学の扉を開きたいならば最後は臨床寄生虫学の土俵で相撲を取らねばならない。

臨床寄生虫学の分野にはまだまだ不思議なことがたくさんある。いくつかを例示すれば、犬糸状虫や犬回虫は体内移行中に脳内に侵入することがある。犬糸状虫幼虫は体内移行中に犬の前眼房に出てきて肉眼で見えることがある。飼い主が変な虫が目の中にいるとって診察を受けに来るので、ペンライトで照らすとあつという間に姿を隠してしまう。しばらく犬を暗くした部屋に入れておいて再び見ると確かに目の中(前眼房)で動いている。しかし、当の犬には角膜白濁もなければ眼房内浮遊物の存在もなく、眼球震盪や羞明などの中枢神経刺激症状ないという現象である。昔から知られていて、幼虫が眼房に入り込む経路が論争点になっていて、体内移行して頸皮下から顔面皮下を経ていわゆる外から眼房隅角部から眼房内に侵入するという説と脳内から視神経の天然孔を通過して眼窩に入り、眼窩と眼球の間隙を迂回して隅角から眼房内に侵入するという説であり、まだ決着はついてない。犬回虫はヒト(特に児童の場合)に感染すると幼虫が眼球内に迷入して寄生虫性眼球炎を発症させて眼を“潰して”しまう。この場合は明らかに脳内に入って天然孔から眼球に入ると考えられている。また、ラットの寄生虫でカタツムリを中間宿主とする広東住血線虫はモルモットや犬やヒトにも感染することができるが、この虫は体内移行中必ず頸部皮下から脳に入り脳と頭蓋骨の間隙を通過して再び頸を経て最終寄生場所の肺動脈に達する。このように脳内を通過するにも関わらずラットの場合は脳炎症状など発症しないが、モルモットも犬もヒトもこの幼虫が脳を通過する時点で激しい寄生虫性脳炎を発症して多くの場合死亡する。なぜ寄生虫は固有宿主のラットには脳炎を起こさせないのだろうか。宿主を殺してしまえば寄生虫も死ぬからラットにだけ脳炎を起こさせない機序が働いていることは推測できるがその機序を解明できれば、寄生現象の本質に迫ることができて寄生虫撲滅につなげることができる。さらには、鉤虫や糞線虫の経皮感染機序、犬回虫の宿主の非妊娠時に感染すると体内移行が抑制され被嚢して休眠状態で待機するが宿主(メス)が妊娠すると体内移行を再開して胎盤感染して胎児に侵入して先天性感染を果たすという現象の機序など、解決しなければならない現象がたくさんあり、これの解析なくして寄生虫研究の成果を挙げたとはいえないとさえ思う。

そういうわけで、臨床寄生虫学研究こそは Koch の第 3 法則に相当する一番大事な部分である。

3 寄生虫学と寄生虫病学

よく「寄生虫が侵入して組織に炎症を起こしたり組織を破壊して症状を起こす」というが、しかし「炎症反応」は、よく考えてみると、起こすきっかけを作ったのは異物である寄生虫であるが、組織を破壊してしまう結果をもたらしたのは、自分で起こした炎症、つまり宿主の防御反応である。寄生虫感染症という病態を理解しようとするときは、きっかけよりも結果を中心にすえた考え方をしないと「寄生虫病学」という学問にならない。つまり「寄生虫学」とは本質的には生物学の範疇に入り、「寄生虫病学」は臨床学の分野なのである。別の分野を例に挙げて言い換えてみると、微生物学と伝染病学はお互いによく似ていて、それでいて学問上はやはり生物学と臨床学という、拠って立つ本質が異なるのである。

いま、学問が進化して従来の学問分類では収まりきれない分野が大きく伸びている。そのために、学問の再編が盛んに行われている。いわゆる学際分野といわれ、既成の分野の中心とは思われてこなかった分野であったに過ぎない学問の窓際族のような分野の研究がどんどん進展して、いまや主要なあるいは重要な分野になってきている。

寄生虫病学は治療という臨床知識と臨床経験を持たないとなかなか入り込めない分野ではないかと思う。例を挙げて話せば、ある犬が犬糸状虫感染症だったとすると、駆虫薬を投与すれば治療完了かということとそんな簡単なものでは終わらない。肺動脈内に寄生していることから駆虫薬で死滅した虫体は血流に押されて、さらに血管の奥に流されて、虫自体の直径が1 mmほどあるので、細い血管に詰まり、肺動脈内血栓塞栓症をもたらす、“虫も死んだが犬も死んだ”という事態を引き起こしてしまい、これでは治療していることにはならない。治療するということは理論と実際をよくよく見極めなくてはならないということである。

もう少しいえば、「治療」というものは、患者の個体ごとに治療方針が異ならざるを得ないものであるから、10人の患者がいれば治療方針も10通りあるということであり、しかも、当然であるが、病状の経過にしたがって施すべき治療方針も常に適切な修正を加えていかなければならないから、その意味で打つべき手は何通りにも分かれる。厳密に言えば、たとえ同じ病気でも、その治療法は、患者一人ひとりで異なり、一つとして同一治療法といったものはないのである。寄生虫病学の研究にはこうした臨床経験が下地になっている不可欠であり、これが分かっていないと「病学」にはならないと思う。一般的に、臨床家というものは、医師でも獣医師でも、長年診療に携わってくると、循環器病でも消化器病でも責任ある診療が行える実質的の力量が備わってくるものである。しかし、そのような経験豊かな臨床医でも寄生虫病は、細菌病やウイルス病などの伝染病と同じように、すぐには入り込めない特殊な知識と経験を必要とする臨床分野である。診療でさえこのようであるから、研究となれば、簡単には入り込めない。すなわち、「寄生虫学」はいわば寄生虫だけを対象とした生物学であり、

研究上は複雑な知識と研究技術の経験を必要とするものの、単に生物学の一分野で収まるものであった。ところが、「寄生虫病学」となると寄生虫本体と宿主(患者)の両方が対象となり、特に後者は医学上複雑な要因が絡まってくる中で倫理上間接的なデータしか得られない条件下で研究することが求められることから研究の難度は一段と増してくるのである。しかしそれでも、寄生虫病学の研究の重要性がますますたかまり、さらなる研究の進展が求められている今日、われわれ研究者は先人に教えを乞い、先人に学びつつ、自らの研究に精進することが求められ定められていると思う。

寄生虫感染には今でも解明されていない寄生現象がいくつも知られているが、その中でも寄生虫の神経を好む行動様式はその筆頭であると思う。たとえば、広東住血線虫は幼虫期の体内移行で必ず脳を通過する。そのとき本来の宿主であるラットは別に脳炎症状らしい症状も示さず、日常生活を送っている。いわばケロッとしている。これに対して、モルモットなどのラット以外のネズミ類や犬や人に感染した場合、激しい脳炎を発症して宿主は死亡する。また、犬の回虫が児童に感染すると頭部に体内移行して高率に眼球内に迷入して全眼球炎を起こし眼をダメにする。また、犬糸状虫は本来の宿主である犬に寄生したときでも目の中(特に眼房内)に迷入して角膜白濁を起こすことがある。もっとも、犬回虫も犬糸状虫も脳炎を起こさせることはないのであるが。これらの現象を考えると、理屈を通り越して不思議でさえある。つまり、生命科学的に合理的な推論の展開を試みても途中で迷路に入り込み行き詰ってしまう。すべて、生物の行動には目的がある、というのは生物学の定理である。これに照らし合わせて、それでは寄生虫が神経系を好む生物学的意義は何か。必須栄養素の関係とか宿主の免疫攻撃からの避難場所になっているとか、すぐにいくつかのことは思いつくが、いずれも「思いつき」ですぐにそれだけでは説明が付かないことに気づかされるのが関の山である。やはり、虫に聞いてみないと本当のところは分からないということだ。

4 カルチャーショック ―私の場合―

よその国を評価する資格のある人は、その国に住み始めて1週間以内か3ヶ月以上の人なのだそうだ。そして誰もが、ほぼ良く似た評価のパターンをたどる。まず、その国の文化・文明の発達、特異性を目のあたりにして驚嘆し、ほめたたえ、感激する。日常生活のひと通りのことを対象に、いちいち賛美を送る。ここまでがだいたい1週間。ところが外国生活に慣れてくると時計の振り子が反対に振れるように。今度は批判し始める。これまた日常生活のこまごましたことがいちいち目についてくる。やれ非能率であるとか、やれ面倒であるとか、やれ不親切だ、などといった不満が出てくる。あくまでも自国でのそれを基準にして批判する。これが3ヶ月以降。この心理状態になってから後が、重要なのだそうだ。つまり、錦もボロも全部見えてきた上で、さてこの国はいったいどういう国なのかと考えるわけだが、この考え次第でその国が好きになったり、逆にきらいになったりする別れ道となるのだという。

さてそこで私の場合、私の場合はフランス。それもパリではなく、北端の地方都市リール市。リール・パストゥール研究所が私の任地。そこでボンジュールとメルシー程度しかフランス語を喋れぬ私が、世界に名だたる研究者に囲まれて恐る恐る研究している様子を想像してもらえれば、この話の舞台設定ができて上がる。では本論に入ろう。

フランス人はのんびりしており、仕事に励むより余暇を楽しみ人生を楽しむことに価値があると考えていると、何かの本で読んだ。確かに人々は、1日に約6時間ほどしか働かず、週休2日制はほぼ完全に実施されており、夕方5時が来るとひたすら職場を離れる。フランス人は夕食を8時から10時までに採るので、彼らは帰宅してから夕食までに個人の時間を有効に、かつ家族のために持つのである。長時間働くことに何かプライドと充実感さえ感ずる日本人の国民性と、できるだけ就労時間を短くし、できるだけ休暇を増やそうと誌、仕事を離れた時間の過ごしからを豊にしようと熱心になるフランス人の国民性の間には、共通点は少ないように感じられた。しかし、これは一般的な庶民意識であって、パストゥール研究所の人々はさすがに良く仕事する。熱心な人は日本人くらい働く。もっとも日本人くらいというのは平均的日本人程度という意味であるが。

このようなフランスを、日本と比較した時、1つの疑問が残った。それはあまり働かないにもかかわらずフランスの研究所から世界をリードする数々の研究成果が上がってくるのに対し、1日10時間労働も決して珍しくない日本では、研究レベルは高いというのに世界をリードする研究成果は必ずしも多くない。せいぜい世界に少し遅れながらも一応世界と足並みをそろえているのがやっとならぬということは何故か。この答えはじきに出た。要するに日本人の研究的オリジナリティーが貧弱であり、かつ研究組織が、オリジナリティー豊かな研究的発想を積極的に育むというにはかな

らずしもできていないからだ。豊かなオリジナリティーは豊かな個性から発生するものであるから、日本のように個性の大切さを唱えているわりには個性を尊重しない国民性では無理かもしれないとさえ思えてくる。もっとも海外で長期間研究している科学者に優秀な人が少なくないことを考えると、日本では無理かもしれないという方が正確であろう。コンピューターなどのエレクトロニクス分野を見るように、日本は世界的貢献度の高い技術を数多く保有するようになってきたが、それらの基本的アイデアを改めて考えてみると大部分は外国で開発されてきたものであることに容易に気づく。例えば今われわれが気軽に使っている最も安価な小型電卓は、真空管で作ったならば、小型ビルディングほどのスペースを必要とする。このアイデアを日本人が考えついたとしても、当時の日本では、そろばんの方が安くて早いなどと一笑に付されたであろうことは容易に想像できる。もっとも今日ではなお似たような状況にあるところが問題なのである。

さて、1年間が過ぎて帰国して、1年ぶりにタタミにどっかとアグラを書いて、ちぐはぐと知りつつ赤ワインのグラスを片手に裂いたスルメに舌つづみを打ち、シャンソンのテープを流しながら、ゴハンとおサシミの夕食に満腹し、フト考えたことは、フランスはやはり遠い国であったということだった。いやヨーロッパはやはり遠い国だと言っても過言ではないだろう。人々は、日本のことをろくに知らず、知識人は別にして、ベトナム以東は同一の文化圏にあると十把ひとからげに思っている人、日本では何語を喋るのかと質問してきた人、ハラキリの真似をしておどけてみせた人、などなど。必ずしも悪気があるわけではなく知らないだけなのだ。私がヨーロッパについて知っていることと、彼らが日本について知っていることを単純に比較すれば、我々のほうがだんぜん勝る。情報が一方通行になっているのだ。

もっとも、情報の一方通行化は、他国ばかりを責めるわけにはいかず、われわれ日本人もまた、知っているつもりでも十分理解していない国が多々あることを忘れてはならない。

だからこそ、私たちは、なお一層の努力を傾けて国際交流、学術交流を推進していかなくてはならないと思うのである。(東京農工大学 留学生広場 T.U.A.T. International Newsletter, Nov. 1987, No.3) .

5 わが国の人のフィラリア寄生虫症

人のフィラリアの代表的な種類にバンクロフト糸状虫とマレー糸状虫症というのがあり、この種類が、昭和の中ごろまでわが国の風土病として前者は奄美諸島に後者は八丈小島に土着していた。八丈小島は東京都の八丈島から 4Km ほどの西の海上に浮かぶ小さな島であるが、どちらも人の往来があったのに、なぜ近接する八丈島や鹿児島本土には蔓延せずにこの 2 つの島だけに限定されていたのか、今でも良く分かっていない。

人のフィラリア症（日本語の呼び名は糸状虫シジョウチュウ）は、アジア（インド洋、太平洋の“南洋”の島々も含む）、オセアニア、アフリカ、南米を中心に熱帯から温帯にかけて世界中に蔓延していて、世界保健機関 WHO の統計によれば、現在でも世界中で 2 億人とも 3 億人ともいわれる患者がいる。人のフィラリアの代表的種類であるバンクロフト糸状虫は 4(♂)-8(♀)cm 程度の長さの糸状の線虫で、この種類が、わが国にも、大昔から北は青森から南は九州・奄美諸島まで広く蔓延していた。

この寄生虫は患者の血を吸った蚊によって人から人へうつされて行き、人に入り込んだ“虫”はリンパ管やリンパ節の中に棲み付くという性質を持っている。症状としては、牛乳のような尿（乳び尿）が出たり、慢性的に足が強くむくみ（浮腫）、何年かするうちに足は股の付け根から足の先まで丸太のように腫れあがり関節は固まって曲がらなくなり、足の皮膚は象の皮膚のように分厚く硬化してしまう。こういう症状を象皮病とよぶ。また、男性患者では、陰囊にも強いむくみが生じ（陰囊水腫）、何年かするうちに陰囊はラグビーボールや櫻島大根のように膨れ上がり、さらに陰茎はあたかも練馬大根のように巨大化して患者によっては腫に達するまでに垂れ下がることになる。こうなると、もちろん治療困難で、実に悲惨な慢性病である。

このフィラリア症に、明治維新の立役者の一人の西郷隆盛が感染していたことは当時の鹿児島ではよく知られていたことだそうであるが、今では鹿児島でもほとんど忘れ去られてしまい、知る人ぞ知るというお話なのだそうだ。西郷さんは二十歳代のとき、何かのことで島津の殿様の勘気に触れ、奄美大島に謹慎させられた。大島では島の女を妻に娶り、島の暮らしに溶け込んでひたすら殿様の許しを待ち侘びた。3 年で謹慎処分が解けて鹿児島島の城下に戻ることが出来たが、このあいだに大島でフィラリア症にかかってしまったのだという。当時としては、診断法や治療法も無く、ましてや何が原因の病気かも分からないものの、それでいてすぐには死ぬことの無い慢性の病気であることは分っていたから、処置の施しようも無くやむを得ず放置したままでいたのであろう。その後何年もして、西郷さんが薩摩藩内で頭角を現し、藩政に重要な役割を担うような立場になり、勝海舟と極秘に会って江戸城の無血開城を取り決めたり、その後征韓論を掲げて政治の中核で激しく対立した頃には、彼のフィラリア症状はかなり進行していたに違いない。それが証拠に、西郷さんの銅像や戦争絵画に、

西郷さんの騎乗姿がっさい無い。そう言われれば、上野の西郷さんの銅像は浴衣を着た立ち姿だし、鹿児島市内の城山の公園に立つ西郷さんの銅像も軍服の立ち姿である。絵画資料にも乗馬姿はっさいみられないのだそうだ。西郷さんの症状は象皮病の症状よりは慢性陰嚢水腫のほうが強く発症していたのだらうと推測される。だから、歩行に重大な支障は無かったので西南の役では反乱軍の総帥として本陣内で戦いの指揮ができたが、陰嚢水腫のために馬には騎乗できなかった。西郷さんは戦に敗れ、最後は城山に立てこもり自刃するのだが、西郷さんの死を官軍に悟られないために側近が西郷さんの首をはねて持ち去り、どの死体が西郷さんの死体か分からないようにしたが、官軍は股間に陰嚢水腫を持つ死体から西郷さんの死を確信したのだそうだ。また程なく別の場所から西郷さんの首も発見され、西郷さんの死が再度確認されたのだそうだ。

わが国に象皮病が大昔から存在したことは平安時代の絵巻にも下肢の皮膚がしわ状に肥大した女性患者が描かれていて、そのような資料が存在することは、寄生虫学専門家の間で知られている。このように当時すでに人のフィラリア症がわが国に蔓延していることが確認されていることから、この寄生虫病自体は奈良時代あるいはそのずっと以前からすでにわが国に土着していたものと推測されている。また江戸時代の有名な浮世絵師の葛飾北斎はいろいろと奇抜なデッサンも残しており、北斎漫画と総称されているが、この描写絵の中にも、ものめずらしさを誇張して、巨大な陰嚢水腫のために歩行が困難な患者を移動させてあげるために、巨大化した陰嚢を風呂敷に包んで結び目に竹を通して健常者の仲間が前となり、患者が後ろとなって、駕籠かきのように竹を担ぎ上げて陰嚢を吊り下げて移動している漫画があることがよく知られており、特に寄生虫病に詳しい研究者や臨床家の間ではそれがフィラリア症による陰嚢水腫症状を描いたものであることがよく知られている。この絵からも江戸時代でもなおフィラリア症が蔓延していたことが分かる。

なお、大正時代に当時の陸軍の実施した全国フィラリア症蔓延調査では、上述したように、青森から沖縄まで全国に患者が存在したという報告が残っている。戦後、厚生省はフィラリア対策に力を注ぎ、昭和 30 年代後半には奄美地方を最後にわが国の人のフィラリア症は撲滅され、昭和 46 年ごろまで最後の患者さんが生存していたそうだが（故榊屋富一琉球大内科教授、私信）、その後は、今日まで、まったく患者の発生は無いということである。

6 日本のエキノコックス症に思う

わが国の最も重要な人畜共通寄生虫症の一つであるエキノコックス感染の知識がなかなか臨床獣医師の間に浸透していない現実がある。エキノコックス寄生虫はイヌ科動物（犬、タヌキ、キツネなど）を終宿主とし、ネズミを中間宿主とするが、ヒトも中間宿主になりえる。つまりこの寄生虫の幼虫段階のものはイヌ科動物からヒトにも“うつる”ことができるというところが脅威なのである。

エキノコックスがわが国の自然界で生き残ろうとしていることは、近年のノミの蔓延にも見るように、人智の及ばぬすき間を潜り抜けて意外な蔓延を展開していることから分かる。視点を変えて、寄生虫の側に立って生き延びる術を検証してみることは意味がある。

寄生虫感染というものには20年30年という大変短い間に薬剤耐性を獲得したり環境の変化や生存状況悪化にも果敢に耐え、感染態度あるいは生態学的態度を敏捷に変化させて生き延びている事例がいくつもある。わずか10数年で非固有宿主といわれて感染が困難なはずだった動物種へ今では容易に実験感染できるようになった事例（犬糸状虫など）さえある。人々は、いや専門家であるはずの医師や獣医師でさえ、数十年前までエキノコックス感染は森の奥の野性の世界の話だと思っていた人が大部分だった。1世紀近く前にわが国で初めてのエキノコックス感染患者がでた北海道礼文島ではその後患者が増え、必死の撲滅対策を続けた結果、21世紀に入らんとするごく最近になってやっと患者ゼロになったということを知っている人は少ないはずだ。さらに、北海道全域が世界でも有数のエキノコックス汚染地区に陥っていることを知らない医師や獣医師は、特に本州以南で、たぶん簡単に見つけ出せるであろう。つまり、人々は知らないのである。あるいは聞いたことがあるといった程度にしか知らないから他人事と思っているに違いない。この人類の浅はかさのここに彼ら寄生虫が付け込んだ。これまで、あらゆる場面で彼らに先手を打たれ、人類はいつも後手に回ってきた。いやむしろ当時のその時代時代の行政担当者の無知と点数稼ぎ的予算編成の裏で防圧対策予算は常に犠牲を強いられてきた。とうとうその付けが回ってきた。捕獲調査でのキタキツネへの感染率はきわめて高い。

では、彼らに先手を打たれてしまった場面を検証してみよう。どれが一番とはいえないが、まず、生態系に関して言えば、北海道のキタキツネはむしろアイドルになっていて、姿を見せてくれたほうが観光客にもみやげ物売り場の業者にも喜ばれるので、姿を見せたら追い払うどころか餌付けでもしかねない。擬人的に言えば、そのことはエキノコックスにとってヒトと接触する機会が増えて好都合である。エキノコックスがヒトに感染すると主に肝臓や脳にシスト腫瘍を形成して肝臓障害や脳障害を起こすが、こういったことを大学で習ったもののその後忘れてしまい日常は意識もしていない医師が多いことはエキノコックスにとって実に都合よく、しかもそんなわけだから

多くの場合癌腫と判断されて手術と相成り、腫瘍摘出手術中に、ガン細胞を確認するための生検を行い、危険な行為とは思わずに、シストを切り開いてしまい何千万という幼虫を患者の体腔内にぶちまけてしまう外科医が昔は少なくなかったこともエキノコックスには好都合だった。次に、社会学的に言えば、行政が礼文島のことばかりに気をとられていて、その他の地域に気が回らず、そのためにエキノコックス感染の危険性など考えてもいなかった反対側の根室地方に冬の流氷に乗って感染キタキツネが上陸することでエキノコックスが“上陸”するためには好都合だった。また、薬理的に言えば、幼虫のエキノコックスによく効いて副作用が少なく使いやすい駆虫剤がまだ発見されていないことはエキノコックスにとっていまだに好都合である。環境学的にも、地球温暖化もかかわって野生動物が繁殖して数を増やし人里にまで行動範囲が広がったことは、犬にも感染できるであろうし、町に生息するネズミ類にも感染できるであろうから、エキノコックスには好都合である。このようにエキノコックスはわずかな感染チャンスも利用して常に感染拡大を企てている。実に怖い話ではないか。

7 地球温暖化に思う

犬の重要な寄生虫病のひとつに蚊が媒介して心臓内に寄生する犬フィラリア症がある。フィラリアの成虫が生み出した子虫（マイクロフィラリアという）は犬の血液中に棲んでいるが、蚊が吸血したときに血液と一緒に吸われてかの体内に入り込み感染幼虫の段階まで発育しその家はその次にイヌを吸血することで犬から犬へと移っていく。

犬フィラリア症は本来は熱帯から温帯地方にかけて蔓延している病気で、感染拡大には、十分な数の蚊が存在することと、蚊の体内でも発育するために気温が高いことが必要である。日本では昔から犬を短命にさせる恐ろしい病気として愛犬家を悩ませてきた。

この病気は、1950年以前には、青森や山形をはじめ、関東地方、大阪地方、岡山、鳥取などの都市とその周辺部での蔓延が確認されていたが、北海道の函館には蔓延していないことが知られていた。しかし、60年代に入ると全国各地での感染調査が徐々に進んだこともあって、本州以西では、高原地帯は無病地であったが、海浜・平野部のほぼ全域ですでに蔓延していたことが確認された。しかもこの頃には函館でも蔓延が確認されて無病地域ではなくなっていたが、札幌は無病地域あることが分かっていた。ところが、60年代の後半になると、札幌でも寄生犬が報告されるようになり、さらに小樽でも報告されるようになった。70年以降には、本州の高原地帯の市街化地域でも蔓延していることが確認され、また函館や札幌でも犬フィラリアの感染は低率ではあるが珍しいことではなくなっていた。そのうえ、北海道でも一、二を争うほどの寒さの厳しい、内陸性気候の旭川でも少数ながら寄生犬の存在が確認されるようになった。

マイクロフィラリアは蚊の体内に入っても、外気温が18℃以上ないと蚊の体内で発育を続けることができないので犬から犬へと感染できないことがわかっている。いずれにしても、蚊もマイクロフィラリアも気温がある程度高くないと生きていけないのである。

そこで、旭川市の過去30年間の平均気温を旭川地方気象台の観測資料から調べてみると、1年のうちで気温が18℃を超える月はわずかに7月と8月の2ヶ月間しかない。マイクロフィラリアは、蚊の体内で感染力をもつ幼虫段階まで発育するには2週間もあればよい。フィラリア幼虫はこの蚊が次に犬を吸血したときを利用してすばやくほかの犬に感染していくのである。

無病地域への犬フィラリア症の蔓延は、人の引越しなどの移動に伴って移り住んできフィラリア寄生の飼い犬が感染源になったのであろう。また旭川でも、蚊は毎年短い夏の間羽化して繁殖を繰り返しているのであろう。

このような犬フィラリアの寒冷地への拡大は日本だけのことではなく、アメリカで

も知られていて、やはり 30 年程前はアラスカのアンカレッジは犬フィラリアの無病地域だったが、今は珍しいことではなくなっている。

地球温暖化の影響は、こんなところからもうかがい知ることができるのである。

8 栄養文化学考

栄養素と健康の研究(実験)は、これまでに報告された研究の多くが、特徴ある食文化を持つ民族間の各種血液学的・血液化学的な組織・臓器検査あるいは機能検査による健康度の比較研究という切り口で検討がなされ、多くの研究成果を上げてきた。例えば、肉食文化のヨーロッパ人と“生”肉食文化のイヌイト人の健康状態比較研究によりイヌイト人のほうが健康であったとする研究結果は、イヌイト人たちが海獣の“生肉”を食べていたからこそヨーロッパ人より健康だったのだという当時としては驚くべき事実が明らかにされたのも、それほど昔のことではない。

この研究が、必須脂肪酸の研究を大いに刺激したナビゲーター的研究の一つとなって、現在われわれにとってほぼ常識的知識となった EPA や DHA の効能が解明されてきて、そのことから魚を多く摂ったほうが体に良いということになってきたのである。もっとも、それが本当ならば、日本民族は昔から世界一健康で世界一利口な民族になっていてもいいのだが。

ところが東北地方の人たちにみるように、中部日本や西日本の非塩あるいは低塩の発酵食文化の人たちに比べて、心臓血管系疾患による死亡率が多いという事実も、東北地方の塩（漬け）文化が健康にマイナスに働いているためと、多くの研究報告が明らかにしてきた。また、わが国全体でみても、つい百年ほど前まで、質素を美德としたこともあって米と魚とわずかな菜っ葉と世界に誇る発酵食品のみそ汁で日本民族は何百年間(それ以上の昔の時代は言うに及ばず)にもわたり、しかも江戸時代後半の世界有数の経済的繁栄時代を迎えた時代を含めて、生きぬいてきた。

しかも日本民族は、大昔から、塩は人の健康にきわめて重要なものとしてあがめられるように扱い、いろいろな文化・知識が開花した江戸時代でさえも、塩は決して安いものではなく、したがって、武士の家庭でさえも、また町民はなおさらいつもふんだんに蓄えているわけではなかった。つまり貴重品の部類なので、塩物は先ず一家の長に欲しいだけ摂ってもらい、家族は遠慮気味にしか摂らなかった。今では考えられないことだ。だから一家の長が年をとって体長を崩してもなお、それは塩が足りないからそうなったのだと信じきって、1日も早く回復してもらいたいと願って病人にせつせと塩を摂るように勧めたほどであった。

このような知識の誤解もあって、日本人は、長いこと人生 50 年と言ってきたような短命民族であった。しかし、興味深いことに、第二次大戦に負けて欧米の肉食文化に曝されたお蔭で(?)、これがわが国の経済成長率の数字だったならばと軽口をたたきたくなるほどに、毎年右肩上がりに平均寿命が伸びて、いまや世界一の長寿国に上り詰めたのはまぎれもない事実であればこそ、今の日本人は栄養学的研究の対象として実に興味深い民族ということが出来る。

実験的にはまだ十分な証明は提出されていないものの、現代の多くの人々が経験的

に納得していることは、若い年代から中年にかけては炭水化物中心の粗食で過ごし、高年になってから良質な蛋白質を十分に摂り、かつ良質な脂肪をほどほどに摂り、塩分を控えると健康に恵まれて長寿が達成されるのではないか、ということである。「民衆は利口だ」という言い方があることを考えれば、この“民衆の感”はあながち馬鹿にしたものでないかもしれない。

9 動物慰霊祭に思う

今年も山口大学獣医学科と動物医療センターによる動物慰霊祭が執り行われる時期となった。この1年間に、愛する伴侶動物を亡くされた飼い主は、時の経つ早さをしみじみと思い起こされているかもしれない。もしかしたら、家族や親戚がなくなるのはつらいけれど何とか心の中では致し方ないことと自らを納得させることができても我が家の一員だった犬猫たちの死のほうに何かあつという間の生涯だったような気がしていまだに納得できないという方の方が少なくないかもしれない。

犬や猫の寿命を研究している、ある獣医大学の中堅の先生がいますが、彼の研究報告によると、2003年の報告ですが、犬の平均寿命は11.9歳、猫は9.9歳ということでした。関東地方の動物病院に協力してもらい、誕生日と死亡日がはっきりとカルテに記録に残されている犬3000匹、猫約1900匹の調査による数字ですから確かです。2003年以後はその先生は発表していませんが、2007年の今もこの数字とほとんど変わらないはずです。30年前、私が大学助手の頃、私の教授は犬の平均年齢は子犬のうちに死ぬ子が多いので、大体6歳だよと言っておられました。15年ほど前には私は大体8歳くらいだなと感じていました。この20-30年ですいぶん長生きになったものです。でも、飼い主からすると11.9歳といわれてもあつという間じゃないかという気分だろうと思う。それだけに何かあつけなく死んでしまったという気持ちに陥るでしょうが、犬の10歳というのは人間の60歳ほどに相当します。12歳といえば70歳ほどです。最大に生きてもせいぜい20歳までです。それが犬族の生物としての宿命です。だから、たとえ薬石効無く亡くなり、気持ち中にはああしてやればよかったとかこうもして置けばよかったといった後悔の念がなかなか消えていかないでしょうが、亡くなった子たちは生きていたときには彼らなりに精一杯生きて飼い主の家に飼われたことを喜んでいたにちがいないのです。

犬や猫たちが長寿になった要因としては、獣医学が進歩して多くの病気が治せるようになってきたことがあげられますが、それと同じくらい、犬猫たちの食餌が改善したことも大きいのです。この20-30年間に、動物の栄養学の研究が目覚ましい勢いで進展しました。犬や猫が健康に生きて病気にも抵抗性をしっかりと持てるようになるためには、蛋白質やカルシウムを人の2-3倍は摂る必要があること、さらに犬や猫は必須脂肪酸がとても重要で、リノール酸やリノレン酸を十分に摂ること、しかもリノレン酸の中でも魚やナタネ油に多く含まれるアルファリノレン酸は重要なことなどがわかってきました。今はスーパーに行くと必ずペットフードコーナーがあり、だいぶ前から、フードの見栄えをよくするために添加していた色素剤の類を使わなくなったものですから、人間の目から見て一見おいしそうには見えない色合いをしている昨今のドライフードですが、栄養学研究成果をもとに製造されていて必要栄養素とカロリーの十分な食品となっています。このペットフードの普及が長寿に大きく貢献して

いることも大きな要因だ。

また、伴侶動物たちが人の健康にどれほど貢献しているかという医学的方面の研究もあります。それは心臓発作を起こした患者の1年後生存率の調査のことですが、動物と暮らしている人と動物と暮らしていない人たちを比較したとき、動物と暮らしている人の1年後生存率は94%だったのに対し、動物と暮らしていない人では72%とやや少なかったのです。このことが意味することは、いかに動物が私たちに癒しの効果を与えてくれて、その結果血圧も安定して、大病したにもかかわらず患者（飼い主）さんの長生きに貢献してくれているということを指しているのです。犬や猫たちはこういう形でも、一見ただ一緒にいるだけのようみえて、実はいろいろなことで人間の健康維持に役立ってくれているのです。

このように犬や猫たちはいまや家族の一員として欠かせぬ存在であると言えます。そしてすばらしい思い出をたくさん残してくれた彼らの生前の姿を折に触れて思い起こし、私たち人間は彼らに感謝の気持ちを持ち続けて行きたいものです(2007年10月3日)。

11 動物介在活動に思う

「ヒューマン アニマル ボンド」という言葉をご存知だろうか。「人と動物の絆」と訳される。このコンセプトは、知っている人は知っているが知らない人は知らないというのが現状であろう。

「人と動物の絆」学会という有名な国際学会があり毎回多くの参加者を集めて定期的に世界各地を巡りながら開催されていて、われわれの宇宙船地球号における人間と動物の共存のあり方が世界規模で研究されている。この学会が目指すものは、人と動物がお互いを必要な存在として、共に伴侶として助け合って生き生きと生涯を共にするための、より望ましいあり方を科学的に研究しかつ実現させていくことにある。日本においても、医師、獣医師、動物愛護団体、ボランティア団体の関係者により、活発に研究もされ実行もされていて、かなりの成果をあげている。

このように「人と動物の絆」というコンセプトは、人と動物は「お互いさま」という考えのもとに成り立っていて、単なる動物好きの動物愛護とは似て非なるものである。しかし残念ながら、一般には、まだまだ誤解が多く、社会的には、奉仕活動精神の崇高性が過剰に強調されるあまり科学的な対応はなにか冷徹なものとなりに捉えられてしまい、つきつまるどころ動物好きと動物嫌いの2局面で判断が下されるところに帰結してしまうことが少なくない。共同住宅におけるペット排除論がその典型的な一つであり、この場合のように低いレベルの話に終始してしまう。

一般の人々に正しい認識がなかなか浸透しないのであるが、たとえば、動物介在として施設を訪問して人々を慰問する活動では「活動に関わるボランティア（人）と動物はその資質や性格が厳しく選別されなければならない」ことや、動物を介在させて心の治療を行う動物介在療法では「たとえば身体障害者への療法と心身障害者への療法は全く別のものである」ことへの認識とか、さらには訪問活動や動物介在医療を受ける側（患者さん、ご老人、あるいは幼児達）に対してもまた活用される動物にとっても「苦痛や強制を伴うやり方はいかなる方法であってもマイナス効果となる」といった基本的原則の認識、そして究極的には、活用される動物は心身ともに正常で健康な個体を提供するために獣医師の協力は不可欠であることと、活動内容が少しでも医療行為に触れるならば医師の指導のもとで行わなければならない、といった“常識”が医師、獣医師のなかでさえ浸透度は必ずしも高いとはいえず、ましてや一般にはなかなか広く認識されていないのが現状である。

とはいえ、都市部が中心であるが、動物愛護・動物福祉・動物虐待の定義と今後の課題への取り組み、あるいは盲導犬・聴導犬・介助犬などの社会参加の問題、伴侶動物と人獣共通感染症の問題、動物介在療法に適した動物（種類や個体の資質、多くは犬）の選別基準の問題、などが、精力的に研究され、頻繁に研究発表や講演会が開催されて、人々への啓蒙活動が活発に行われている。

この方面の先進国である欧米では、家畜の中で伴侶動物になり得る動物（犬、猫、馬を中心にして）の社会的権利というものは、動物愛護と動物福祉の観点から、すでに法律や規則の中に当然のこととして組み込まれている。このことに鑑みれば、日本でも法律が部分的に整いはじめたのではあるが、近い将来かならずや動物介在活動（正式には、アニマル アシステッド アクティビティ **Animal assisted activity, AAA**）と動物介在療法（同、アニマル アシステッド セラピー **Animal assisted therapy, AAT**）が市民権を得て、動物行政や医療行政の不可欠な市民要望事項となるものと考えられる。

山口大学学生公募研究「おもしろプロジェクト 10 年史」下巻 496～531 頁、「山口大学おもしろプロジェクト'02」報告書にて。

「山口県内における動物介在ケア活動の実態と要望の実状に関する調査研究」、「指導教員のコメント」より。

12 略歴と業績

13

1946（昭和 21）年 3 月 8 日生。

本籍 京都府。

現住所 東京都立川市。

学歴

- 1964.3 東京都立城北高校卒業。
1964.4 東京農工大学農学部獣医学科入学。
1968.3 同 卒業。
1968.6 獣医師免許証(No.9306)取得。
1979.6 農学博士（東京大学 No.4982）取得。
「犬糸状虫の免疫学的研究」

職歴

- 1968.4 獣医科医院にて勤務獣医師として勤務。
1969.11 同 退職。
1969.11 東京農工大学農学部教務員（獣医学科）として採用。
1971.5 同 農学部助手。
1981.4 同 農学部講師。
1984.9 同 農学部助教授（1999年12月31日まで）。
1984.9 在外研究。France, Pasteur 研究所（指導教授 A. Capron 博士）。
（昭和 59 年度日本学術振興会特定国派遣研究者、1 年間）。
1988.5 在外研究。France, Pasteur 研究所（指導教授 A. Capron 博士）。
（昭和 63 年度日本学術振興会特定国派遣研究者、2 ヶ月間）。
1990.4 岐阜大学助教授大学院連合獣医学研究科（ D 合）を併任。
1990.10 東京大学農学部講師（非常勤）を併任（1999年12月31日まで）
1993.4 東京農工大学農学部附属家畜病院長(1993-1995)。
2000.1 山口大学教授・農学部家畜病院研究室。
2004.10 山口大学教授大学院連合獣医学研究科（ D 合）を併任。
2006.1 山口大学教授・農学部獣医臨床診断学研究室（改称）。
2008.3 山口大学定年退職。
2008.4 山口大学名誉教授。

獣医師診療歴

動物病院勤務医 1 年半

東京農工大学家畜病院 32年
山口大学家畜病院 8年
合計 40年

著書

- 1 大石 勇、早崎峯夫、中垣和英(1986):犬糸状虫 一寄生虫学の立場から一。大石 勇編、文永堂出版、東京、172 p.
- 2 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1988):獣医診療指針。友田 勇、ほか編、講談社サイエンティフィック、東京、980 p.
- 3 大石 勇、早崎峯夫、小林茂雄、高橋 貢、若尾義人(1990):犬糸状虫症。大石 勇編、文永堂出版、東京、298 p.
- 4 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1995):新版獣医臨床寄生虫学(小動物編)、編集委員会編、306 p、文永堂出版、東京
- 5 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1996):新獣医内科学、編集委員会編、文永堂出版、東京、785 p.
- 6 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1996):イラストでみる猫の病気、小野憲一郎、他、編、講談社サイエンティフィック、東京、135 p.
- 7 早崎峯夫、藤井邦蔵、富澤 勝、林 良博、沼田陽一、井本史夫、小方宗次 (1996) : 幸せになる犬との暮らし、小暮規夫監修、ベネッセコーポレーション、東京、209p。
- 8 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1997) : 獣医内科診断学、長谷川篤彦、他、監修、文永堂出版、東京、385 p.
- 9 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1997) : 獣医寄生虫検査マニュアル、今井壮一、他編、文永堂出版、東京、306 p.
- 10 早崎峯夫ほか(1997) : 犬と楽しく暮らそう、NHK 教育テレビ番組「趣味悠々」視聴者用テキスト本。NHK 出版、東京。
- 11 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1998) : 獣医臨床病理学、編集委員会編、近代出版、東京、439 p.
- 12 早崎峯夫、小守 忍(1998) : 小動物の臨床アレルギー、学窓社、東京、153 p.
- 13 早崎峯夫、藤井邦蔵、富澤 勝、林 良博、沼田陽一、井本史夫、小方宗次 (2003) : 幸せになる犬との暮らし。林 良博編、幻冬舎、東京、216p。
- 14 早崎峯夫ほか、多数執筆者 (2004) : 人畜共通感染症。木村 哲ほか、編、医薬ジャーナル社、東京、447 p。
- 15 早崎峯夫ほか、多数執筆者 (2007) : 新獣医学辞典。編集委員会編、チクサン出版、東京、1600 p。

総説

- 1 早崎峯夫(1981): 獣医領域における寄生虫ワクチンの現状(1)。東獣ジャーナル (旧東京都獣医師会雑誌)、No.194, 14-15.
- 2 早崎峯夫(1981): 獣医領域における寄生虫ワクチンの現状(2)。東獣ジャーナル (旧東京都獣医師会雑誌)、No.195, 14-15.
- 3 早崎峯夫(1986): 再び、寄生虫ワクチンの現状について(1)。東獣ジャーナル (旧東京都獣医師会雑誌)、No.244, 11-12.
- 4 早崎峯夫(1986): 再び、寄生虫ワクチンの現状について(2)。東獣ジャーナル (旧東京都獣医師会雑誌)、No.246, 11-13.
- 5 早崎峯夫(1988): 寄生虫と免疫。比較臨床血液研究会誌、1, 24-28.
- 6 早崎峯夫(1988): DEC 剤のミクロフィラリア殺滅機序。比較臨床血液研究会誌、1(2), 59-63.
- 7 早崎峯夫(1991): 犬糸状虫感染の免疫学。日本獣医師会雑誌, 44, 781-789
- 8 Hayasaki, M.(1993): Immunological aspect on canine heartworm, *Dirofilaria immitis*, infection. Bulletin de la Société Franco-Japonaise des Sciences Vétérinaires, No.3, 1-13.
- 9 早崎峯夫(1993): 犬糸状虫感染に対するジエチルカルバマジンとイベルメクチンの使用。長崎大学熱帯医学研究所研究集会報告書 (科研費) (1993)、8-12.
- 10 早崎峯夫(1993): 抗糸状虫剤ジエチルカルバマジンの作用機序。長崎大学熱帯医学研究所研究集会報告書 (科研費) (1993)、28-33.
- 11 早崎峯夫(1993): 活性化血小板の活性酸素によるミクロフィラリアの殺虫作用。化学療法領域、9(6), 1083-1088.
- 12 早崎峯夫(1994): 栄養と免疫。獣医畜産新報、47(6), 487-490.
- 13 早崎峯夫(1996): 犬と猫の栄養の特徴。SAC(Small Animal Clinic), No.104, 15-24.
- 14 早崎峯夫(1996): 猫の犬糸状虫症。日本小動物獣医師会雑誌(JSAVA)、No.36, 43-47.
- 15 Atkins, C.E., Atwell, R.B., Dillon, R., Genchi, C., Hayasaki, M., Holms, R.A., Knight, D.H., Lukof, D.K., McCall, J.W., and Slocombe, J.O.D.(1996): 1995 Guidelines for the diagnosis, treatment, and prevention of heartworm (*Dirofilaria immitis*) infection in cats. - Recommendations of the International Feline Heartworm Disease Council. The Proceedings of Heartworm Symposium'95 (The American Heartworm Society), M.D.Soll and D.H.Knight, eds, Batavia, Illinois, 309-312.
- 16 早崎峯夫(1997): 猫の犬糸状虫症の臨床。獣医畜産新報、50(4)、330-333.
- 17 早崎峯夫(1997): 犬糸状虫感染と犬糸状虫症。獣医畜産新報、50(6)、463-469.
- 18 Atkins, C.E., Atwell, R.B., Dillon, R., Genchi, C., Hayasaki, M., Holms, R.A., Knight, D.H., Lukof, D.K., McCall, J.W., and Slocombe, J.O.D.(1997): American

heart-worm society guideline. Guidelines for the diagnosis, treatment, and prevention of heartworm(*Dirofilaria immitis*) infection in cats. Compendium on Continuing Education for the Practicing Veterinarian, 19(4), 422-429.

- 19 早崎峯夫 (1997) :ノミアレルギー。インターズー、AD&S (アドス)、3(1)、13-16。
- 20 早崎峯夫 (2003) : 抗アレルギー薬。獣医臨床皮膚科、9、81-85。
- 21 早崎峯夫(2004):動物介在ケアー思いやり社会創造の一環ー。
月刊「医療情報」4月号18。
- 22 M. HAYASAKI(2004):Echinococcoses au Japon. (仏文). Bulletin de la Société Franco-Japonaise des Sciences Vétérinaires (日仏獣医学会誌) , 15(1,2), 40-44.
- 23 早崎峯夫(2005) : 猫の犬糸状虫症。獣医寄生虫学会誌、4(1),31-38.
- 24 早崎峯夫、佐伯英治、内田明彦 (2005) : 日本のエキノコックス感染。獣医畜産新報 58(12), 984-988.
- 25 M. HAYASAKI(2005):La Création et l'Evolution de la Société Franco-Japonaise des Sciences Vétérinaires. (仏文). Bulletin de la Société Franco-Japonaise des Sciences Vétérinaires (日仏獣医学会誌) , 16(1,2), 24-28.

学位論文

学位審査提出論文 :

早崎峯夫 (1984) :「犬糸状虫症の免疫学的研究」(農学博士、東京大学 No.4982)
主査 : 臼井和哉教授、
副査 : 尾形 学教授、藤原公策教授、友田 勇助教授、長谷川篤彦助教授
掲載された学術刊行誌 :
東京農工大学農学部学術報告第 25 号、1-26.

学術論文 (* : Corresponding Author)

- 1 早崎峯夫、大石 勇、小林茂雄、久米清治(1972):犬の糞便中に発見された犬糸状虫 *Dirofilaria immitis* について。日本獣医師会雑誌、25, 598-599.
- 2 早崎峯夫、瀬島 孟、大石 勇、小林茂雄、久米清治(1973):犬糸状虫による陳旧性奇異性塞栓症の 1 例。日本獣医師会雑誌、26, 13-19.
- 3 早崎峯夫、大石 勇、久米清治(1973):リスザル(*Saimiria sciureus*)の腹腔から発見された *Dipetalonema gracile*(Rud. 1809) Diesing,1861 について。日本獣医師会雑誌、26, 195-197.
- 4 早崎峯夫、大石 勇、小林茂雄、久米清治(1973):犬糸状虫 *Dirofilaria immitis* の胎盤感染について。日本獣医師会雑誌、26, 417-418.

- 5 早崎峯夫、大石 勇、小林茂雄、久米清治、最上義典、瀬島 孟(1974):犬糸状虫による奇異性塞栓症 7 例について。日本獣医師会雑誌、27, 2-9.
- 6 早崎峯夫、大石 勇、久米清治(1974):犬の糞便中に発見されたコウガイビルについて。日本獣医師会雑誌、27, 321-323.
- 7 Yoshimura, K., Aiba, H., Hayasaki, M. and Yoshida, H.(1976): Delayed hypersensitivity responses of guinea pig and rat to *Angiostrongylus cantonensis* infection. Japanese Journal of Veterinary science, 38, 579-593.
- 8 Hayasaki, M.(1981): Indirect hemagglutination test for diagnosis of canine filariasis. Japanese Journal of Veterinary Science, 21-26.
- 9 早崎峯夫、中垣和英、小林茂雄、大石 勇(1981):犬糸状虫寄生犬における免疫応答について。日本獣医学雑誌、43, 909-914.
- 10 早崎峯夫、大石 勇(1982):日本の野生タヌキにおける犬糸状虫 *Dirofilaria immitis* の流行について。寄生虫学雑誌、31,177-183.
- 11 Hayasaki, M.(1982): Reaginic and hemagglutinating antibody production in dogs infected with *Dirofilaria immitis*. Japanese Journal of Veterinary Science, 44, 63-70.
- 12 Hayasaki, M.(1982): Passive transfer of anti-*Dirofilaria immitis* hemagglutinating antibody from the mother dog to its offspring. Japanese Journal of Veterinary Science,44, 781-786.
- 13 早崎峯夫、大石 勇、宗像 彰(1982) : 東京の犬および猫における胃虫 *Physaloptera praeputialis* の感染について。寄生虫学雑誌、31, 499-506.
- 14 Hayasaki, M.(1983): Antigenicity of microfilarial and adult *Dirofilaria immitis* in indirect fluorescent antibody test. Japanese Journal of Veterinary Science, 45, 113-115.
- 15 早崎峯夫、大石 勇、小林茂雄(1984):犬の原発性甲状腺機能低下症と甲状腺機能検査の応用と評価。日本獣医師会雑誌、37, 10-15.
- 16 早崎峯夫、小林茂雄、大石勇(1984): Levamisole 塩酸塩の間欠投与による犬における犬糸状虫予防効果。寄生虫学雑誌、33, 429-433.
- 17 成島悦雄、橋崎文隆、河野典子、斉藤 勝、田辺興記、早崎峯夫、大石 勇(1984):日本のレッサーパンダ *Ailurus fulgens* における犬糸状虫 *Dirofilaria immitis* の寄生。寄生虫学雑誌、33, 475-481.
- 18 早崎峯夫、中垣和英、大石 勇(1984):犬糸状虫幼虫に対する Levamisole 短期投与の殺滅効果。寄生虫学雑誌、33, 573-576.
- 19 早崎峯夫、大石 勇(1985):塩酸レバミゾールの長期投与による犬糸状虫予防試験。日本獣医師会雑誌、38, 8-12.
- 20 早崎峯夫、大石 勇(1985):塩酸レバミゾールの間欠投与による犬糸状虫の予防試験。

- 日本獣医師会雑誌、38, 154-157.
- 21 鈴木嘉尚、小寺主司、木村 肇、小林茂雄、早崎峯夫、大石 勇、杉浦邦紀(1985):塩酸レバミゾールの間欠投与による野外での犬糸状虫の予防効果。日本獣医師会雑誌、38, 216-218.
 - 22 早崎峯夫、大石 勇(1987):犬の全身性強皮症様疾患の1例。日本獣医師会雑誌、40, 455-458.
 - 23 Ohishi, I., Katae, H., Hayasaki, M. and Tada, Y.(1987):Prophylactic activity of ivermectin against *Dirofilaria immitis* infection in dogs: Larvicidal activity of ivermectin against *D. immitis* larvae 30 days after infection. Japanese Journal of Veterinary Science, 49, 115-120.
 - 24 Ohishi, I., Katae, H., Hayasaki, M., Nakagaki, K. and Tada, Y.(1987): Prophylactic activity of ivermectin against *Dirofilaria immitis* infection in dogs: Establishment of effective dose and administration schedule. Japanese journal of Veterinary science, 49, 439-445.
 - 25 Cesbron, J-Y., Hayasaki, M., Joseph, M., Lutsch, C., Grzych, J-M. and Capron, A.(1988): *Onchocerca volvulus*: Monoclonal anti-idiotypic antibody as antigen signal for the microfilaricidal cytotoxicity of diethylcarbamazine-treated platelets. Journal of Immunology, 141, 279-285.
 - 26 Hayasaki, M. and Ohishi, I.(1989):Influence of immune treatments against *Dirofilaria immitis* infection in the dog. Japanese Journal of Veterinary Science, 51, 540-546.
 - 27 Hayasaki, M. and Ohishi, I.(1989):Influence of immuno-suppressants against *Dirofilaria immitis* infection in the dog. Japanese Journal of Veterinary Science, 51, 957-962.
 - 28 Kaneko, H., Hayasaki, M. and Ohishi, I.(1990):Antigenic identification of excretory-secretory products of adult *Dirofilaria immitis*. Japanese Journal Veterinary Science, 52, 995-1000.
 - 29 Hayasaki, M., Harayama, A., Seki, H., Konno, K. and Ohishi, I.(1991): Immunological treatment of cough occurring in dog with dirofilariasis. Journal Veterinary Medical Science, 53, 651-653.
 - 30 大野弘子、早崎峯夫、大石 勇(1991):犬糸状虫成虫の寄生部位と血行動態の超音波画像による検討。日本獣医師会雑誌,44, 1115-1120.
 - 31 早崎峯夫、松井利依、紺野克彦、大石 勇(1993):即時型皮内検査法による犬のアレルギー性皮膚炎の診断。日本獣医師会雑誌,46, 236-240.
 - 32 鈴木 肇、紺野克彦、丸尾幸嗣、早崎峯夫(1993):犬の幽門部腫瘍2例。日本獣医師会雑誌、46, 492-494.

- 33 早崎峯夫、秋山祐子、紺野克彦、大石 勇(1993):自家調製ノミアレルゲンによるノミアレルギー性皮膚炎の減感作療法。日本獣医師会雑誌、46, 866-869.
- 34 早崎峯夫、近藤真理、紺野克彦、大石 勇(1994):犬のアレルギー性皮膚炎における抗アレルギー薬の評価、日本獣医師会雑誌,47,29-33.
- 35 Hayasaki, M*, Nanamura, F. and Konno, K.(1994):Immunoblotting analysis of somatic components of *Dirofilaria immitis*. Journal of Veterinary Medical Science, 56,1181-118.
- 36 Konno, K. and Hayasaki, M*(1995): Antigenic cross reactivity among *Dirofilaria immitis* and four intestinal parasites-species in the dog. Japanese Journal of Parasitology, 44, 161-164.(correspondence author)
- 37 Kuramochi, T., Kita, K., Takamiya, S., Kojima, S. and Hayasaki, M.(1995): Comparative study and cDNA cloning of the flavoprotein subunit of mitochondrial complex (succinate-ubiquinone oxidoreductase: fumarate reductase) from the dog heartworm, *Dirofilaria immitis*. Comparative Biochemistry and Physiology, 111B, 491-502.
- 38 Hayasaki, M.(1996): Re-migration of fifth stage juvenile *Dirofilaria immitis* into pulmonary arteries after subcutaneous transplantation in dogs, cats, rabbit. Journal of Parasitology, 82(5), 835-837.
- 39 Hayasaki, M. * and Hattori, C.(2001):Experimental induction of contact allergy in dog by means of certain sensitization procedures. Veterinary Dermatology, 11, 227-233.
- 40 Hayasaki, M.(2001): Immunological analysis of agglutination in *Dirofilaria immitis* microfilariae. Journal of Veterinary Medical Science, 63, 903-907.
- 41 Hayashiya,S., Tani, K., Morimoto, M., Hayashi, T., Hayasaki, M., Nomura, T., Une, S, Nakaichi, M. and Taura, Y.(2002): Expression of helper 1 and helper 2 cytokine mRNAs in freshly isolated peripheral blood mononuclear cells from dogs with atopic dermatitis. Journal of Veterinary Medicine A, 49, 27-31.
- 42 Song, K.H., Hayasaki, M., Choliq, C., Cho, K.W., Han, H.R., Jeong, B.H., Jeon, M.H., Park B.K. and Kim, D.H.(2002): Immunological responses of dogs experimentally infected with *Dirofilaria immitis*. Journal of Veterinary Science, 3, 109-114.
- 43 Song, K.H., Hayasaki, M., Cho, K.W., Lee, S.E. and Kim, D.H.(2002): Cross-reactivity between sera from dogs experimentally infected with *Dirofilaria immitis* and crude extract of *Toxocara canis*. The Korean Journal of Parasitology, 40, 195-198.
- 44 Hayasaki, M. *, Okajima, J., Song, K.H. and Shiramizu, K.(2003): Diurnal

- variation in microfilaremia in a cat experimentally infected with larvae of *Dirofilaria immitis*. *Veterinary Parasitology*, 111, 267-271.
- 45 Song, K.H., Lee, S.E., **Hayasaki, M.**, Shiramizu, K., Kim, D.H. and Cho, K.W.(2003): Seroprevalence of canine dirofilariosis in South Korea. *Veterinary Parasitology*, 114, 195-198.
- 46 Song, K.H., Kim, D.H. and **Hayasaki, M.**(2004): The PCR-based detection of *Babesia gibsoni* infection in dogs(German shepherds) reared in South Korea. *Annals of Tropical Medicine and Parasitology*, 98, 149-153.
- 47 佐伯英治、宋 根鍋、朴 台鎮、内田明彦、**早崎峯夫*** (2004) : 飼い犬より検出されたイヌハイダニ *Pneumonyssoides caninum* 幼虫。日本獣医師会雑誌、57、245-248.
- 48 Inui,A., Itamoto, K., Takuma, T., Tsutsumi, H., Tanigawa, M., **Hayasaki, M.**, Taura, Y. and Manba, K.(2004): Age-related changes of bone mineral density and microarchitecture in miniature pigs. *Journal of Veterinary Medical Science*, 66, 599-609.
- 49 宇根 智、寺下明子、中市統三、板本和仁、宋 根鍋、音井威重、田浦保穂、**早崎峯夫*** (2004): ビーグル犬の心エコー断層診断における形態・機能学的な標準値。日本獣医師会雑誌、57 (12)、793-798。
- 50 Liu, J., Song, K.H., Lee, S.E., Lee, J.Y., Lee, J.I., **Hayasaki, M.**, You, M.J. and Kim, D.H.(2005): Serological and molecular survey of *Dirofilaria immitis* infection in stray cats in Gyunggi province, South Korea. *Veterinary Parasitology*, 130, 125-129.
- 51 **Hayasaki, M.***, Ikeda, T., Mori, N., Hongo, H., Katsuya, A., Song, K. H., Ooi, H. K. and Uchida, A.(2005): Immunoblot analysis of special antigen bands predictable for *Dirofilaria immitis* infection in cats. *Veterinary Parasitology*, 131, 325-329.
- 52 **早崎峯夫***、勝矢朗代、Song, KH(2007): 免疫ブロット法を用いた山口県における猫の犬糸状虫感染調査。日本獣医師会雑誌、61,549-552.
- 53 Oh, H.W., Jun, H.K., You, M.J., **Hayasaki, M.** and Song, K.H.(2008): Ectopic migration of an adult heartworm in a dog with dirofilariosis. *Korean Journal of Parasitology*, 46(3), 171-173.

その他 学術論文 (* : Corresponding Author)

- 1 小林茂雄、**早崎峯夫**、大石 勇(1980): 「サイポール TM」による犬糸状虫予防の野外成績。獣医畜産新報、No.706, 269-272.
- 2 小沢明子、大石 勇、**早崎峯夫**(1983): 犬糸状虫症における血液凝固異常。小動物臨床、

2, 16-18.

- 3 早崎峯夫、大石 勇(1984):犬糸状虫症の化学療法。獣医畜産新報、No.754, 284-288.
- 4 時田尚志、萩本修一、古茶ゆかり、中垣和英、早崎峯夫、大石 勇、中村 孝(1989):核の形態変化を指標とした試験管内抗癌剤感受性試験—血液関係悪性腫瘍の経験—。比較臨床血液研究会誌、1(3),51-55.
- 5 齋藤有香、早崎峯夫*、紺野克彦(1995):実験的急性腎不全犬における血液透析の効果。獣医畜産新報、48, 449-452. (責任著者)
- 6 高橋木綿子、早崎峯夫*、他 (1996): わが国におけるノミアレルギー性皮膚炎の発生状況。日本小動物獣医師会雑誌、No.36, 35-41. (責任著者)
- 7 住吉俊亮、内田明彦、小暮規夫、早崎峯夫* (1998): 糞便検査によるツシマヤマネコの寄生虫感染調査-新感染虫種 2 種の検出。獣医畜産新報、52、713-717. (責任著者)
- 8 Hayasaki, M*., Takahashi, Y., Hattori, C., Sato, Y. and Shimizu, Y.(1998): Intradermal skin test and hyposensitization therapy in dogs with allergic dermatitis. Japanese Journal of Veterinary Clinical Pathology, 4(1,2), 7-11.
- 9 成田琢郎、木山真大、川上智子、船津 格、早崎峯夫* (2003) : 動物介在ケア活動の必要性に関する調査研究—これからの動物介在活動や動物介在療法活動に意義—。山口獣医学雑誌、30、75-86. (責任著者)
- 10 詫摩美幸、宇根 智、宋 根鍋、音井威重、中市統三、田浦保穂、早崎峯夫* (2005) : 犬の血圧に及ぼす暑熱ストレスと反復運動の影響。獣医畜産新報、58, 721-725 (2005)。

解説

- 1 早崎峯夫(1984): 世界獣医寄生虫学会に出席して(上)。獣医畜産新報、No.750、54-56.
- 2 早崎峯夫(1984): 世界獣医寄生虫学会に出席して(下)。獣医畜産新報、No.751、48-51.
- 3 早崎峯夫(1984): 北フランス、リール市の空の下から、リールパストゥール研究所にて(上)。獣医畜産新報、No.767、49-51.
- 4 早崎峯夫(1985): 北フランス、リール市の空の下から、リールパストゥール研究所にて(下)。獣医畜産新報、No.768、43-46.
- 5 早崎峯夫(1986): 日本にパストゥール研究所創設される！ 獣医畜産新報、No.780、463-464.
- 6 早崎峯夫(1986): フランスの獣医大学と大学制度。日本獣医師会雑誌、39, 535-538.
- 7 早崎峯夫(1987): パストゥール研究所と獣医学—過去と現在—。日本獣医師会雑誌、40, 131-135.
- 8 早崎峯夫(1987): 今、寄生虫学会が問題にしていること—第6回国際寄生虫学会に出席して—。獣医畜産新報、No.793、49-52.

- 9 早崎峯夫(1988): 第 23 回世界獣医寄生虫学会(モンテリオール)に出席して。獣医畜産新報、No.801、261-264。
- 10 早崎峯夫(1989): 乳牛発祥の地、ジャージー島、ガンジー島見聞録。獣医畜産新報、No.810、59-60。
- 11 早崎峯夫(1991):日仏獣医学会の活動状況と第 3 回研究会の開催報告。日本獣医師会雑誌、44, 622-623.
- 12 長谷川篤彦、早崎峯夫(1991):日本とフランスの獣医学交流。日本獣医師会雑誌、44, 35-39.
- 13 早崎峯夫(1992): アレルギー皮膚炎の診断と治療。第 22 回日本小動物獣医学会年次大会講演集、108-111。
- 14 早崎峯夫(1992): 一色於菟四郎先生からのメッセージ。個人出版、25 頁。
- 15 早崎峯夫(1993): 第 14 回世界獣医寄生虫学会に出席して。日本獣医師会雑誌、46, 974-975。
- 16 早崎峯夫(1993):アレルギー皮膚検査の実際。日本小動物獣医師会雑誌、33, 49-51.
- 17 早崎峯夫、ほか(1998):「獣医医療の社会性を考える」。獣医畜産新報、51, 297-307.
- 18 早崎峯夫(1999): 世界獣医寄生虫学会の学術貢献と横浜大会の意義。日本獣医師会雑誌、52, 753-756.
- 19 早崎峯夫(1999): 日仏獣医学会(学会、研究会紹介、その 8)、日本獣医師会雑誌、52, 536-537.
- 20 早崎峯夫(2001): 日仏獣医学学術交流の定期化の兆しー第 6 回日仏獣医セミナーの報告ー。日本獣医師会雑誌、54, 878-880.
- 21 早崎峯夫(2002): 第 18 回世界獣医寄生虫学会(2001、ストレザ、イタリア)にみる最新の研究報告。獣医畜産新報、55, 409-419.
- 22 早崎峯夫(2006): 第 20 回世界獣医寄生虫学会(クライストチャーチ、ニュージーランド)で問題になっていたこと。獣医畜産新報、59, 311-314.
- 23 早崎峯夫(2008): ベルギー、アントワープで開催された第 21 回世界獣医寄生虫学会(WAAVP2007)にみる獣医寄生虫学研究の最新動向。獣医畜産新報、61, 231-236.

翻訳

- 1 早崎峯夫、池田忠生、大島誠之助、原 茂雄、吉村治郎(1991):R.ウオルターの犬と猫の栄養学(Wolter R.: Diététique du chien et du chat、仏語)、早崎峯夫 監訳・分担訳)、日本臨牀社、大阪、252 p.
- 2 早崎峯夫(1992):実用ガイド・小動物のアレルギー(Baker, E., Small animal allergy: a practical guide)、学窓社、東京、152 p. (全訳)
- 3 早崎峯夫(1993):小動物臨床における臨床徴候と診断(Ford, RB,Clinical signs and

diagnosis in small animal practice)。友田 勇、本好茂一監訳、文永堂出版、東京、691 p.(分担訳)

- 4 早崎峯夫(1995):免疫性疾患とアレルギー性疾患(Baker, E. and Fersburg, P.J., eds., The Veterinary Clinics of North America, Vol.24, No.4, 1994, Immune-Associated Diseases and Nondermatologic Allergy), 116 p., 学窓社、東京(全訳)。
- 5 早崎峯夫(1997):サウンダース小動物臨床マニュアル(Birchard,SJ, Sherding, RG, eds, Saunders Manual of Small Animal Practice)、長谷川篤彦監訳、文永堂出版、東京、1579 p.(分担訳)
- 6 早崎峯夫ほか、多数執筆者(1998) : ブラッド獣医学辞典(Blood & Studdert/ Comprehensive veterinary Dictionary)、友田 勇 総監修、文永堂出版、東京 (分担訳)、1273 p.
- 7 早崎峯夫ほか、多数執筆者(2001) : 犬と猫の 5 分間獣医診療指針(The 5 Minute Veterinary Consult -Canine and Feline-)、長谷川篤彦監修、1286p、学窓社、東京 (分担訳)。
- 8 早崎峯夫ほか、多数執筆者 (2003) : メルク獣医マニュアル、第 8 版(Aiello, SE, ed., The Merck Veterinary Manual, 8th ed.,)、長谷川篤彦ほか、監修、学窓社、東京、2287p. (分担訳)
- 9 早崎峯夫 (2003) : 内分泌学。(Behrend, EN, Kemppainen, RJ, eds., The Veterinary Clinics of North America, Vol.31, No.5, 2001, Endocrinology) 、学窓社、東京、223p. (全訳)。
- 10 早崎峯夫ほか、多数執筆者 (2003) : 小動物の心臓病学—基礎と臨床—(Kittleson, MD., Kienle, RD., eds., Small Animal Cardiovascular Medicine)、メディカルサイエンス社、東京、708p. (分担訳)。

口頭発表

- 1 Trimelarsen の犬糸状虫寄生犬における毒性試験、知見補遺、適量注射の影響について。
岩上、大石、早崎、小林、久米。第 166 回臨床獣医学会、埼玉(1970)。
- 2 犬糸状虫症の病態所見に関する研究(2)血清総蛋白量と血清蛋白分画の変化。
大石、小林、早崎、久米。第 166 回臨床獣医学会、埼玉(1970)。
- 3 犬の糞便中に発見された犬糸状虫 *D. immitis* について。
早崎、大石、小林、久米。第 166 回日本臨床獣医学会、埼玉(1970)。
- 4 Trimelarsen の犬における毒性試験、知見補遺、筋肉注射後にみられる WBC と S-GOT 活性値の増加について。

- 早崎、大石、小林、久米。第 171 回日本臨床獣医学会、東京(1971)。
- 5 卵円孔開存症による犬糸状虫成虫の交差性塞栓症の 2 例。
最上、瀬島、早崎、近藤、大石、久米。第 171 回日本臨床獣医学会、東京(1971)。
- 6 陳旧性犬糸状虫性交差性塞栓症の 1 例。
早崎、瀬島、大石、小林、久米。第 72 回日本獣医学会、鳥取大学(1971)。
- 7 リスザルの腹腔から発見された *Dipetalonema gracile* について。
早崎、大石、久米。第 31 回日本寄生虫学会東日本大会、東京大学(1971)。
第 73 回日本獣医学会、日本大学(1972)。
- 8 犬糸状虫の胎盤感染について。
早崎、大石、小林、久米。第 73 回日本獣医学会、日本大学(1972)。
- 9 Fenthion の犬糸状虫子虫に対する効果試験。
小林、柿沼、大竹、早崎、大石、久米。第 73 回日本獣医学会、日本大学(1972)。
- 10 犬糸状虫性奇異性塞栓症 5 例について。
早崎、大石、小林、久米、最上、瀬島、野田、内田。第 183 回日本臨床獣医学会、岐阜(1972)。
- 11 犬糸状虫症の病態に関する研究、(3)寄生犬の血液学的変化について。
大石、早崎、岩上、李、小林、久米。第 183 回日本臨床獣医学会、岐阜(1972)。
- 12 犬の糞便中に発見されたコウガイビルについて。
早崎、大石、久米、最上。第 75 回日本獣医学会、東京(1973)。
- 13 犬糸状虫症の免疫学的研究、赤血球凝集反応(HA)、補体結合反応(CF)およびゲル内沈降反応(Gel D)について。早崎、大石、小林、久米。第 76 回日本獣医学会、鹿児島(1973)。
- 14 台湾猿にみられた鼻蛭(*Dinobdella ferox*)の 1 例。
大石、早崎、久米、最上。第 76 回日本獣医学会、鹿児島(1973)。
- 15 犬糸状虫の病態所見に関する研究、(4)一般臨床所見の変化について。
早崎、小林、大石、久米。昭和 48 年度日本臨床獣医学会、広島(1973)。
- 16 犬糸状虫症の免疫学的研究、間接赤血球凝集反応(IHA)における成虫抗原と mf 抗原の特異性について。早崎、大石、小林、久米。第 78 回日本獣医学会、野幌(1974)。
- 17 犬糸状虫症の病態所見に関する研究(6)寄生犬のトランスアミナーゼの変化。
大石、早崎、小林、久米。昭和 49 年度日本臨床獣医学会、宮城(1974)。
- 18 中間発育場所における犬糸状虫幼虫に対する化学療法、(11)数種薬剤の間欠投与の効果。
大石、早崎、小林、久米。第 44 回日本寄生虫学会、京都(1975)、第 79 回日本獣医学会、東京(1975)。
- 19 犬糸状虫症の免疫学的研究 腸内寄生虫体が間接赤血球凝集反応(IHA)に及ぼす影響について。早崎、大石、小林、久米。第 79 回日本獣医学会、東京(1975)。
- 20 犬糸状虫の免疫学的研究 人工感染犬における間接赤血球凝集反応(IHA)抗体価の変

- 動について。早崎、大石、小林、久米。第 79 回日本獣医学会、東京(1975)。
- 21 犬糸状虫症の病態所見に関する研究(7)寄生犬における血清ビルビン値の変化。
西村、大石、早崎、小林、久米。昭和 50 年度日本臨床獣医学会、大阪(1975)。
- 22 犬糸状虫に対する Melarsoprol の駆虫効果。大石、小林、早崎、久米、平賀、渡辺、
新井。第 80 回日本獣医学会、大阪(1975)。第 45 回日本寄生虫学会大会、弘前(1976)。
- 23 犬糸状虫症の免疫学的研究 移行抗体について (予報)。
早崎、大石、久米。第 80 回日本獣医学会、大阪(1975)
- 24 広東住血線虫症における細胞性免疫について。
吉村、早崎、吉田、合場。第 81 回日本獣医学会、東京(1976)、第 45 回日本寄生虫学
会大会、弘前(1976)。
- 25 犬糸状虫症の免疫学的研究 mf、幼虫、成虫抗原による IHA 反応性の比較。
早崎、大石、小林、久米。第 82 回日本獣医学会、盛岡(1976)。
- 26 犬糸状虫の化学療法に関する研究 ; Diethylcarbamazine の抗子虫作用について。
中垣、早崎、大石、久米。第 83 回日本獣医学会、相模原(1977)。
- 27 「フィラリア性咳嗽」の免疫学的研究。
早崎、原山、関、紺野、大石。第 83 回日本獣医学会、相模原(1977)。
- 28 犬糸状虫症の診断に関する研究 子虫の各種検査法の比較評価。
大石、志方、小林、早崎、久米。昭和 52 年度日本臨床獣医学会、神奈川(1977)。
- 29 犬糸状虫症の免疫学的研究 母子間移行抗体について。
早崎、大石、久米。第 84 回日本獣医学会、宮崎(1977)。
- 30 犬の強皮症様疾患の 1 例。
早崎、大石、小林、久米。昭和 52 年度日本臨床獣医学会、神奈川(1977)。
- 31 犬糸状虫幼虫の前眼房内迷入例について。
早崎、宗像、大石、小林、久米。昭和 52 年度日本臨床獣医学会、東京(1978)。
- 32 犬糸状虫症の免疫学的研究 免疫抑制処置の感染率に及ぼす影響。
早崎、大石、久米。第 85 回日本獣医学会、東京(1978)。
- 33 Melarsonyl potassium の犬糸状虫成虫に対する筋肉注射と静脈注射の殺虫効果の比較。
早崎、波多野、大石、久米、小林。昭和 53 年度日本臨床獣医学会、名古屋(1978)。
- 34 Levamisole hydrochloride の間欠投与による犬糸状虫の予防効果(1)。
大石、早崎。第 88 回日本獣医学会、札幌(1979)。第 49 回日本寄生虫学会大会、石川
(1980)
- 35 犬糸状虫人工感染犬におけるレアギン様抗体と IHA 抗体の産生について。
早崎、大石。第 88 回日本獣医学会、札幌(1979)。第 49 回日本寄生虫学会大会、石川
(1980)
- 36 猫より検出された胃虫 Physaloptera praeputialis とその駆虫成績について。
宗像、早崎、大石。昭和 54 年度日本臨床獣医学会、水戸(1979)。

- 37 Levamisole hydrochloride の長期連続投与による犬糸状虫の予防効果。
大石、早崎。第 39 回日本寄生虫学会東日本大会、筑波 (1979)。
- 38 犬糸状虫特異赤血球凝集抗体の母子間移行について。
早崎、大石。第 39 回日本寄生虫学会東日本大会、筑波(1979)。
- 39 犬糸状虫寄生犬における細胞性免疫について。
早崎、中垣、小林、大石。第 89 回日本獣医学会、東京(1980)。第 40 回日本寄生虫学会東日本大会、栃木(1980)。
- 40 犬より検出された胃虫 *Physaloptera praeputialis* とその駆虫成績。
宗像、早崎、大石。昭和 55 年度日本臨床獣医学会、関東(1980)。
- 41 本邦中央地域の野生タヌキにおける犬糸状虫の流行について。
早崎、大石。第 90 回日本獣医学会、山口(1980)。第 41 回日本寄生虫学会東日本大会、浜松(1981)。
- 42 Levamisole hydrochloride を用いた長期連続と間欠投与の犬糸状虫駆虫効果。
大石、早崎。第 90 回日本獣医学会、山口(1980)。
- 43 犬糸状虫の治療における Levamisole hydrochloride の駆虫効果と副作用。
小林、小沢、早崎、田村、徳島、小沢、大石。第 91 回日本獣医学会、東京(1981)。
- 44 犬糸状虫症の病態発生に関する研究、血清 lactic dehydrogenase と creatine phosphokinase 活性値および isoenzyme の変化について。大熊、早崎、大石。第 91 回日本獣医学会、東京(1981)。
- 45 Levamisole hydrochloride の間欠投与による犬糸状虫の予防効果(2)。
早崎、小林、大石。第 92 回日本獣医学会、青森(1981)。第 51 回日本寄生虫学会大会、府中(1982)。
- 46 Flubenndazole の犬糸状虫に対する駆虫効果。
小林、添田、田村、徳島、小沢、中垣、早崎、大石。第 93 回日本獣医学会、相模原(1982)。第 42 回日本寄生虫学会東日本大会、相模原(1982)。
- 47 Levamisole hydrochloride の間欠投与による犬糸状虫の予防効果(3)。
早崎、大石。第 93 回日本獣医学会、相模原(1982)。第 42 回日本寄生虫学会東日本大会、相模原(1982)。
- 48 犬糸状虫の体長と性成熟について。
大石、中垣、早崎、小林。第 94 回日本獣医学会、鳥取(1982)。第 52 回日本寄生虫学会大会、大阪(1983)。
- 49 正常犬の主要臓器における LDH および CPK の活性値の isoenzyme について。
大熊、早崎、大石。第 94 回日本獣医学会、鳥取(1982)。
- 50 犬糸状虫の成虫と子宮内マイクロフィラリアの IHA 反応における抗原性。
早崎、大石。第 95 回日本獣医学会、東京(1983)。第 52 回日本寄生虫学会大会、大阪(1983)。

- 51 犬糸状虫症の化学療法に関する研究、Diethylcarmabazine citrate 処理子虫の未感染犬末梢血液への出現性について。中垣、中垣、**早崎**、小林、大石。第 95 回日本獣医学会、東京(1983)。
- 52 犬糸状虫症の病態に関する研究、血液凝固系への影響。
小沢、**早崎**、大石。第 95 回日本獣医学会、東京(1983)。
- 53 抗マイクロフィラリア剤の犬糸状虫子虫への影響 Diethylcarbazine の抗マイクロフィラリア機序について。
中垣、**早崎**、中垣、大石。第 43 回日本寄生虫学会東日本大会、埼玉(1983)。
- 54 レッサーパンダ *Ailurus fulgens* における犬糸状虫寄生。
成島、橋崎、河野、齋藤、田辺、**早崎**、大石。第 97 回日本獣医学会、東京 (1984)。
- 55 犬糸状虫感染に対する ivermectin の予防効果(1)有効投与量の決定。
早崎、大石、片江、多田。第 97 回日本獣医学会、東京(1984)。
- 56 Levamisole hydrochloride の抗犬糸状虫子虫効果の基礎的検討。
塩田、中垣、**早崎**、大石。第 97 回日本獣医学会、東京(1984)。
- 57 Levamisole hydrochloride の集中投与による犬糸状虫成虫、子虫の駆虫効果。
小林、中垣、**早崎**、大石。第 97 回日本獣医学会、東京(1984)。
- 58 飼犬より検出されたイヌハイダニ *Pneumonyssoides caninum*。
早崎、中垣、小林、大石。第 97 回日本獣医学会、東京(1984)。
- 59 犬糸状虫症の病態に関する研究、急性犬糸状虫症における血液凝固系の異常。
小沢、**早崎**、小林、中垣、大石。第 97 回日本獣医学会、東京(1984)。
- 60 犬糸状虫の感染に対する ivermectin の予防効果(2)投与量と投与間隔。
大石、**早崎**、中垣、片江、多田。第 98 回日本獣医学会、鹿児島(1984)。
- 61 犬糸状虫症の病態に関する研究、犬糸状虫寄生犬の血清補体価一 予報。
中垣、小林、**早崎**、大石。第 98 回日本獣医学会、鹿児島(1984)。
- 62 犬糸状虫感染犬における成虫駆虫が血液凝固系に与える影響。
木村、中沢、中垣、**早崎**、大石。第 99 回日本獣医学会、東京(1985)。
- 63 糸状虫特異抗イデオ型単クローン抗体の有用性について、抗体の産生と特異性の評価。
早崎、A. Capron。第 101 回日本獣医学会、東京(1986)。第 55 回日本寄生虫学会大会、札幌(1986)。
- 64 ミクロフィアリアの宿主腎臓に与える影響。
中垣、**早崎**、大石。第 101 回日本獣医学会、東京(1986)。
- 65 犬糸状虫の幼虫に対する ivermectin の影響。
大石、片江、**早崎**、多田。第 55 回日本寄生虫学会大会、札幌(1986)。
- 66 成虫駆虫が宿主の免疫応答に及ぼす影響について。
中沢、**早崎**、中垣、小林、木村、大石。第 102 回日本獣医学会、仙台(1986)。
- 67 犬糸状虫の各発育段階に対する犬の体液性免疫応答の態度。

- 早崎、堀井、渡辺、大石。第 103 回日本獣医学会、藤沢(1987)。
第 56 回日本寄生虫学会大会、横浜(1987)。
- 68 犬糸状虫駆虫へのアスピリン併用が血液凝固系及び血小板機能に与える影響。
佐藤、竹田、中垣、早崎、小林、大石。第 103 回日本獣医学会、藤沢(1987)。
- 69 犬糸状虫子虫の駆虫が血液凝固系に与える影響。
岡、中垣、早崎、大石。第 103 回日本獣医学会、藤沢(1987)。
- 70 犬糸状虫の寄生診断における ELISA の評価。
高木、中垣、早崎、小林、大石。第 104 回日本獣医学会、野幌(1987)。
- 71 犬、猫の主要の化学療法における抗腫瘍剤の感受性について。
井村、中垣、時田、中村、早崎、小林、大石。第 104 回日本獣医学会、野幌(1987)。
- 72 寄生虫と免疫。早崎。第 1 回比較臨床血液研究会、東京(1987)。
- 73 日本における犬糸状虫症の化学療法。早崎。第 128 回日仏生物学会、東京(1987)。
- 74 犬糸状虫の血液凝固・線溶系に及ぼす影響。
深瀬、板垣、成井、奥山、大野、橋本、秋浜、早崎。第 128 回日仏生物学会、東京(1987)。
- 75 DEC 剤のマイクロフィラリア殺滅機序。血小板と特異抗原の役割および抗イデオ型単クローン抗体による証明。Cesbron, JY, 早崎、Joseph, M., Lutsch, S., Cryzch, JM, A. Capron. 第 105 回日本獣医学会、東京(1988)。
第 3 回比較臨床血液研究会、栃木(1988)。第 48 回日本寄生虫学会東日本大会、神奈川(1988)。
- 76 Ivermectin の影響を受けた犬糸状虫マイクロフィラリアの蚊体内での発育。
田中、中垣、早崎、大石。第 106 回日本獣医学会、大阪(1988)。
- 77 東京都多摩地区における犬糸状虫症の疫学的研究。
岡、小林、中垣、早崎、大石、福富。第 106 回日本獣医学会、大阪(1988)。
- 78 犬糸状虫の寄生診断における ELISA の評価。
高木、中垣、小林、早崎、大石。第 106 回日本獣医学会、大阪(1988)。
- 79 犬糸状虫感染犬における免疫現象。
早崎。第 107 回日本獣医学会、寄生虫分科会シンポジウム、東京(1989)。
- 80 ELISA による犬糸状虫感染診断、抗体検出法と抗原検出法の比較検討。
早崎、吉田、大槻、大石。第 107 回日本獣医学会、東京(1989)。第 58 回日本寄生虫学会大会、東京(1989)。
- 81 血小板膜上のフィラリア排泄分泌抗原リセプターの存在と生化学的特性。
早崎、Cesbron, JY, Capron, A. 第 131 回日仏生物学会、東京(1989)。
- 82 犬糸状虫 PBS 抽出抗原の抗原性の免疫生化学的検討。
七村、早崎、金子、大石。第 108 回日本獣医学会、岩手(1989)。
- 83 犬糸状虫排泄分泌抗原の免疫生化学的性状について。
金子、早崎、大石。第 108 回日本獣医学会、岩手(1989)。第 49 回日本寄生虫学会東

- 日本大会、東京(1989)。
- 84 Cite による犬糸状虫抗原検出の基礎試験。
熊坂、塩沢、小林、**早崎**、大石。平成元年度日本臨床獣医学会、東京(1989)。
- 85 Cite による犬糸状虫の寄生診断。
小林、金子、**早崎**、大石。平成元年度日本臨床獣医学会、東京(1989)。
- 86 回旋糸状虫(*Onchocerca volvulus*)排泄分泌抗原特異抗イデオ型単クローン抗体の作成。
早崎、Cesbron, JY, Capron, A. 第 132 回日仏生物学会 (総合会津中央病院滝沢研修所、会津若松、福島)、1989/11/6。
- 87 ここまで解ってきた免疫防御機構。
早崎。第 10 回小動物臨床研究会、卒後教育セミナー、大阪(1989)。
- 88 免疫介在性皮膚疾患の病態と治療について。
早崎。第 10 回小動物臨床研究会、パネルディスカッション、大阪(1989)。
- 89 犬糸状虫感染診断のための簡易抗体抗原検査キットの評価について。
早崎、日本小動物臨床病理研究会、東京(1990)。
- 90 犬糸状虫及び数種腸内寄生虫における抗原性の相異について。
紺野、**早崎**、金子、大石。第 109 回日本獣医学会、東京(1990)。
第 50 回日本寄生虫学会東日本大会、東京(1990)。
- 81 Moxidectin による犬糸状虫寄生予防の基礎試験。
早崎、大石。第 110 回日本獣医学会、宮崎 (1990)。第 50 回日本寄生虫学会東日本大会、東京(1990)。
- 82 犬糸状虫寄生犬にみられる咳嗽の免疫学的治療。
早崎。第 3 回日仏獣医学会、東京(1990)。
- 83 犬糸状虫駆虫におけるアスピリン併用投与の血液凝固系に及ぼす影響。
竹田、佐藤、**早崎**、大石。第 8 回日本比較臨床血液研究会、東京(1991)。
- 84 犬糸状虫特異モノクロナル抗体の抗原特異性。
早崎、大町、田川、八重樫、紺野、大石。第 111 回日本獣医学会、東京(1991)。
- 85 犬における犬糸状虫感染に対する Moxidectin 間欠投与の予防効果。
大石、紺野、**早崎**、山沢、志村、池上。第 112 回日本獣医学会、岐阜(1991)。第 51 回日本寄生虫学会東日本大会、山梨(1991)。
- 86 犬のアレルギー皮内反応検査の検討。
松井、秋山、**早崎**、紺野、大石。平成 3 年度日本小動物獣医学会、東京(1991)。
- 87 ノミアアレルギー皮膚炎に対する減感作療法療法の 1 例について。
秋山、松井、**早崎**、紺野、大石。平成 3 年度日本小動物獣医学会、東京(1991)。
- 88 猫の肥満細胞白血病の 1 治験例。
佐藤、紺野、鈴木、**早崎**、大石。平成 3 年度日本小動物獣医学会、東京(1991)。
- 89 犬における特発性血小板減少性紫斑病の 1 症例。

- 紺野、早崎、佐藤、大石。平成3年度日本小動物獣医学会年次大会、横浜(1992)。
- 90 アレルギー疾患の診断と治療。
早崎、日本小動物獣医師会'92年次大会、教育講演、大阪(1992)。
- 91 ジエチルカルバマジンの血小板活性化による活性酸素産生とミクロフィラリアの殺滅。
早崎。長崎大学熱帯医学研究所研究集会、長崎、(1992)。
- 92 犬糸状虫感染に対するジエチルカルバマジンとイベルメクチンの使用。
早崎。長崎大学熱帯医学研究所研究集会、長崎、(1992)。
- 93 犬のアレルギー性皮膚炎の皮内検査による診断と減感作療法療法。
早崎、松井、秋山、紺野、大石。第114回日本獣医学会、札幌(1992)。
- 94 猫の腎障害における血液透析法の臨床的応用に関する研究。
紺野、谷口、早崎、大石。第114回日本獣医学会、札幌(1992)。
- 95 犬のアレルギー皮内検査の標準化の試みとアレルギー皮膚炎の発生頻度。
早崎、秋山、紺野、大石。第10回日仏獣医学会研究会、東京(1993)。
- 96 抗アレルギー剤の犬アレルギー性皮膚炎に対する有効性の検討。
早崎、近藤、紺野、大石。第115回日本獣医学会、東京(1993)。
- 97 実験的急性腎不全犬における血液透析療法の基礎的検討。
紺野、齋藤、早崎、大石。第115回日本獣医学会、東京(1993)。
- 98 犬糸状虫由来モノクロナル抗体を用いた間接蛍光抗体法による犬糸状虫及び犬の腸管内線虫との抗原交差性の検討。紺野、糺場、早崎、大石。第116回日本獣医学会、山口(1993)。第53回日本寄生虫学会東日本大会、藤沢(1993)。
- 99 糸状虫実験感染犬の感染経過に伴う血液凝固系の経時的変化。
片桐、紺野、早崎、大石。第116回日本獣医学会、山口(1993)。
- 100 犬糸状虫(*Dirofilaria immitis*)ミトコンドリア複合体、活性部分のクローニング。
倉持、北、小島、紺野、早崎。第53回日本寄生虫学会東日本大会、藤沢(1993)。
- 101 アレルギー性皮膚炎における皮内検査成績および各種治療成績。
早崎、紺野、佐藤。平成5年度日本小動物獣医学会年次大会、松江(1993)。
- 102 犬糸状虫 *Dirofilaria immitis* ミトコンドリア複合体。Fpサブユニットの一次構造解析。倉持、北、小島、紺野、早崎。第63回日本寄生虫学会大会、秋田(1994)。
- 103 犬糸状虫実験感染犬の感染経過中における犬糸状虫排泄分泌抗原認識の推移。
早崎、佐藤、紺野。第118回日本獣医学会、青森(1994)。第54回日本寄生虫学会東日本大会、東京(1994)。
- 104 犬の甲状腺ホルモン(T3,T4)値の正常値の検討、加齢的推移。
紺野、早崎。平成6年度関東地区日本獣医学会、山梨(1994)。
- 105 犬の即時型アレルギー皮内検査の判定基準の標準化の試み。
早崎、紺野。平成6年度日本小動物獣医学会、東京(1994)。
- 106 随時尿を用いた尿中逸脱酵素の診断的有用性。

- 齋藤、紺野、早崎。日本小動物臨床病理研究会、東京(1995)。
- 107 犬糸状虫実験感染犬の感染経過中におけるミクロフィラリア抗原認識の推移。
早崎、栗田。第 119 回日本獣医学会、東京(1995)。
- 108 間接蛍光抗体法による犬糸状虫と犬腸内線虫との抗原交差性の検討。
早崎、糺場、紺野。第 64 回日本寄生虫学会大会、浜松(1995)。
- 109 3 種糸状虫間における PBS 抽出粗抗原の抗原性。
高久、早崎。第 120 回日本獣医学会、鳥取 (1995)。
- 110 犬の食餌アレルギー性皮膚炎と思われる症例の治験例について。
高橋、清水、服部、森、紺野、早崎。第 2 回日本獣医臨床病理学会年次大会、東京(1996)。
- 111 猫の犬糸状虫症。早崎。第 65 回日本寄生虫学会症例検討会、福岡(1996)。
- 112 蛍光抗体法による犬糸状虫と他種蠕虫類との間の抗原交差性。
乙守、早崎、紺野、森井。第 121 回日本獣医学会、相模原(1996)。
- 113 ELISA による尿中犬糸状虫由来抗原の検出の試み。
伊藤、早崎、紺野、森井。第 121 回日本獣医学会、相模原(1996)。
- 114 猫の犬糸状虫症の実験感染成績、臨床所見および診断法の検討。
岡島、早崎、紺野、森井。第 121 回日本獣医学会、相模原(1996)。
- 115 わが国のノミアレルギー性皮膚炎の発生。
高橋、早崎、紺野、森井。第 121 回日本獣医学会、相模原(1996)。
- 116 犬の即時型アレルギー皮内検査法における判定基準の再評価。
早崎。第 121 回日本獣医学会、相模原(1996)。
- 117 犬糸状虫由来物質のマウスの抗体産生能に及ぼす影響。
苅田、早崎。第 122 回日本獣医学会、帯広(1996)。
- 118 アレルギー疾患の減感作(免疫)療法。
服部、清水、森、早崎。1997 年度日本獣医臨床病理学会、池袋(1997)。
- 119 犬糸状虫症の病態発生機序の新概念。早崎。第 123 回日本獣医学会、藤沢(1997)。
- 120 犬におけるアレルギー反応の研究 - 接触アレルギー皮膚感作試験法の基礎的検討。
服部、太田、早崎。第 123 回日本獣医学会、藤沢(1997)。
- 121 *Acanthocheironema viteae* の糸状虫由来物質による免疫賦与処置の感染抵抗性に及ぼす影響。久保田、早崎。第 123 回日本獣医学会、藤沢(1997)。
- 122 犬糸状虫感染猫の虫体抗原認識の推移。森、早崎。第 124 回日本獣医学会、鹿児島(1997)。
- 123 犬のアレルギー性皮膚炎の皮内検査 108 頭の成績と減感作療法 22 頭の成績。
早崎。平成 9 年度日本小動物獣医学会年次大会、福岡(1998)。
- 125 犬糸状虫症の病態発生機序の新概念。早崎。第 67 回日本寄生虫学会、神戸市産業興センター(1998)。
- 126 イムノブロット法による猫の犬糸状虫感染診断の検討。早崎。平成 10 年度日本小動

- 物獣医学会(東京)、(1998)。
- 127 Mf凝集現象。早崎。第150回日仏生物学会、関西日仏会館(1998)。
- 128 犬糸状虫ミクロフィラリア凝集現象の免疫学的解析。早崎。第127回日本獣医学会、相模原(1999)
- 129 Immunological aspect of microfilarial agglutination phenomenon as "medusa-head" formation, on *Dirofilaria immitis*.
Hayasaki. 第68回日本寄生虫学会大会、自治医大(1999)。
- 130 Immunological aspect of microfilarial agglutination phenomenon as "medusa-head" formation, on *Dirofilaria immitis*.
Hayasaki. The 26th World Veterinary Congress (Lyon'99), Lyon, France, 23-26, Sept.(1999).
- 131 イムノブロット法による猫の犬糸状虫感染診断。
本江、森、池田、早崎。第128回日本獣医学会、熊本・化血研(1999)。
- 132 イムノブロット法による猫の犬糸状虫感染診断、一野外試験一。
本江、森、池田、早崎。平成11年度日本小動物獣医学会(東京)、東京(1999)。
- 133 山口大学家畜病院におけるアレルギー皮内反応成績(2000-2001)。
菅野、寺下、勝矢、奥田、猪熊、大西、早崎。平成13年度山口県獣医学会、小郡。(2001)。
- 144 イムノブロット法によるネコの犬糸状虫感染診断。勝矢、早崎。平成13年度山口県獣医学会、小郡。(2001)。
- 145 飼い犬より検出されたイヌハイダニ *Pneumonyssoides caninum* 幼虫。早崎。平成13年度山口県獣医学会、小郡。(2001)。
- 146 Diagnosis of *Dirofilaria immitis* infection in cats by immunoblot analysis.
Hayasaki. The 18th World Association for Advancement of Veterinary Parasitology(WAAVP, Stresa, Itaria, 26-30 Aug.,(2001).
- 147 Immunoblot diagnosis of dirofilariasis in cats. **Hayasaki**. The 6th Conference de la Société Franco-Japonaise des Sciences Vétérinaires. Nice, France, 15-16, Sept., (2001)
- 148 山口大学家畜病院におけるアレルギー皮内反応成績(2000-2001)。
早崎。第26回日仏獣医学会研究例会、日仏会館、2月27日(2002)。
- 149 CSKミニブタにおける Quantitative computed tomography を用いた骨質の経年齢的評価。
乾あずさ、板本和仁、詫摩哲也、萬場、田浦、早崎、他6名(山口大、佐賀畜試、CSKリサーチ、佐賀医大、
宮崎大)、第132回日本獣医学会(岩手大)(2001)。
- 150 ミニブタにおける骨質の経年齢的評価。乾あずさ、板本和仁、詫摩哲也、萬場光一、田浦保穂、早崎、他6名(山口大、佐賀畜試、CSKリサーチ、佐賀医大、宮崎大)、

- 第 134 回日本獣医学会(岐阜大)(2001)。
- 151 犬の心エコー画像診断法のビーグル犬における正常値。寺下明子、宇根 智、中市統三、田浦保穂、大西堂文、白水完治、**早崎**。第 41 回山口県獣医学会、小郡 (2002)。
- 152 犬の心エコー画像診断法のビーグル犬における正常値。寺下明子、宇根 智、中市統三、田浦保穂、大西堂文、白水完治、**早崎**。平成 14 年度日本小動物獣医学会(中国地区大会) (2002)。
- 153 山口県内における動物介在ケア活動の実態と要望の実状に関する調査研究。成田琢郎、木山真大、川上智子、山西富野、乾あずさ、渡辺朱美、船津 格、白水完治、**早崎**。第 42 回山口県獣医学会、小郡 (2003)。平成 15 年度日本獣医公衆衛生学会(中国)、米子コンベンションセンター。米子(2003)。
- 154 心原性発作と診断された犬と猫の 2 症例。
安達、中市、板本、宇根、田浦、**早崎**。第 42 回山口県獣医学会、小郡 (2003)。
- 155 山口県内における動物介在ケア活動の実態と要望の実状に関する調査研究。成田、木山、川上、山西、乾、渡辺、船津、白水、**早崎**。平成 15 年度日本小動物獣医学会(中国地区大会)、広島 (2003)。
- 156 犬糸状虫 Mf の走査電子顕微鏡学的観察。
山西富野、田中修平、萬場光一、**早崎**。第 137 回日本獣医学会、日大、藤沢(2004)
- 157 ELISA によるアレルギー特異 IgG および IgE 抗体の測定。
成田、木山、網本輝昭、**早崎**。第 43 回山口県獣医学会、小郡 (2004)。
- 158 オシロメトリック法による犬の血圧測定に及ぼす暑熱ストレスと反復運動の影響。
宇根、詫摩美幸、宋 根鍋、音井威重、中市統三、田浦保穂、**早崎**。第 138 回日本獣医学会、札幌、2004。
- 159 痒痒犬におけるアレルギー皮内反応成績。**早崎**。山口大学家畜病院臨床検討会。
2004,9/27。
- 160 犬糸状虫マイクロフィラリアの走査電子顕微鏡学的観察。**早崎**、田中秀平、萬場光一。
第 74 回日本寄生虫学会大会 (講演要旨集、103 頁)、米子コンベンションセンター (2005/4/8-9)。
- 161 犬糸状虫 Mf の形態学。**早崎**。第 17 回獣医臨床寄生虫学談話会 (目黒寄生虫館、目黒、東京) , 2005/6。
- 162 後手に回った日本のエキノコックス症の防疫—その文献調査的研究—。
早崎, 宇根智。第 44 回山口県獣医学会 (公衆衛生) (抄録集 11 頁) , 2005/8。
- 163 ネコの犬糸状虫症の突然死について。
早崎峯夫, 宇根智。第 44 回山口県獣医学会 (小動物) (抄録集 26 頁) , 2005/8。
- 164 犬糸状虫マイクロフィラリアの定期出現性現象。**早崎**、山西富野、乾あずさ、渡辺朱美、木山真大、成田琢郎、宇根智。第 140 回日本獣医学会学術集会 (鹿児島) (要旨集 90 頁) 2005/9。

- 165 ミクロフィラリアはなぜ夜に血中に増えるのか。早崎。山口大学家畜病院臨床検討会。2005,9/27。
- 166 犬における鼻粘膜内嗅覚鞘性細胞(OECs)の証明と初代培養法の確立。宇根智, 鈴木久志, 森本夏樹, 板本和仁, 中市統三, 田浦保穂, 早崎。第 140 回日本獣医学会学術集会 (鹿児島) (要旨集 183 頁)、2005/9。
- 167 ミクロフィラリアのサーカディアンリズムの一考察。早崎。第 163 回日仏生物学会 (日仏会館、渋谷、東京)、2005/5。
- 168 Ecological and Parasitological study on spread of *Dirofilaria immitis* infection. **Hayasaki M.**, Song KH., Une S. The Abstract issue of the 20th International Conference of the World Association for Advancement of Veterinary Parasitology (Christchurch, New Zealand,2005), p245, 2005,10/16-20.
- 169 犬糸状虫ミクロフィラリアのサーカディアンリズムの誘因解明。早崎。第 165 回日仏生物学会 (要旨集 2 頁) , 2006/6。
- 170 難治性のアレルギー皮膚炎発症犬の 1 例。早崎、宇根 智。第 45 回山口県獣医学会 (要旨集 33 頁), 2006/8。
- 171 犬糸状虫ミクロフィラリアのサーカディアンリズムの誘因解明。早崎。第 165 回日仏生物学会 (要旨集 2 頁) , 2006/6。
- 172 とう骨尺骨癒合不全の犬の 1 例。宇根 智、野田史子、板本和仁、中市統三、田浦保穂、早崎。第 45 回山口県獣医学会 (講演抄録 38 頁) , 2006/8。
- 173 頸椎脱臼した犬の 1 例。神村賢哉、宇根 智、金沢亜希、野田史子、板本和仁、中市統三、田浦保穂、早崎。第 45 回山口県獣医学会 (講演抄録 39 頁) , 2006/8。
- 174 胸壁に発生した悪性間葉腫の 1 症例。林 一旗、宇根 智、野田史子、板本和仁、中市統三、田浦保穂、早崎。第 45 回山口県獣医学会 (講演抄録 50 頁) , 2006/8。
- 175 マンソン裂頭条虫の生態 (43)。内田明彦、川上 泰、永友光子、黄鴻堅、早崎。第 142 回日本獣医学会学術集会 (山口大学) (要旨集 65 頁)、2006/9。
- 176 犬糸状虫 *microfilaria* の periodicity と光波長の関係。早崎。第 142 回日本獣医学会学術集会 (山口大学) (要旨集 65 頁)、2006/9。
- 177 難治性アレルギー皮膚炎発症犬の 1 例。早崎、宇根 智。第 44 回中国地区連合獣医師会大会 (要旨集 78 頁)、2006/10。
- 178 アトピーはなぜ治りにくいのか。早崎。山口大学家畜病院臨床検討会。2006,11/28。
- 179 犬糸状虫ミクロフィラリアのサーカディアンリズム、一光波長との関係。早崎。第 166 回日仏生物学会(要旨集 3 頁)、(広島大学・理・臨海実験所、尾道市向島),2006/12。
- 180 犬におけるイミダクロプリド・ペルメトリン合剤 (フォートレオンTM) の蚊の吸血抑制効果。早崎、佐伯英治。H18 年度日本獣医師会学会年次大会 (さいたま) (要旨集 222 頁)、2007/2。
- 181 人獣共通感染症 “エキノコックス” の日本拡大—文献調査的研究—。早崎。第 167 回

- 日仏生物学会（日仏会館、渋谷区恵比寿）、2007/5/19.
- 182 日本におけるエキノコックスの拡大。早崎。第 16 回日本獣医臨床寄生虫学会（目黒寄生虫館、目黒、東京）、2007/12/1.
- 183 犬におけるイミダクロプリド・ペルメトリン合剤（フォートレオンTM）の蚊の吸血抑制効果。早崎、佐伯英治。第 16 回日本獣医臨床寄生虫学会（目黒寄生虫館、目黒、東京）、2007/12/1.
- 184 ベルギー・ゲント市で開催された第 21 回世界寄生虫学会(WAAVP2007)にみる獣医寄生虫学研究の最新動向。早崎。第 17 回日本獣医臨床寄生虫学会（目黒寄生虫館、目黒、東京）、2007/12/1.
- 185 鼻咽頭部から下顎部に発生した主要の摘出により QOL が改善した 1 症例。神村賢哉、宇根 智、野田史子、板本和仁、中市統三、田浦保穂、早崎。第 46 回山口県獣医学会、2007/8/18.
- 186 犬の前立腺癌の 1 例。井上達矢、宇根 智、野田史子、板本和仁、中市統三、田浦保穂、早崎。第 46 回山口県獣医学会、2007/8/18.
- 187 口腔内黒色腫に対して治療を実施した犬の 7 症例。松田美智子、宇根 智、野田史子、原口友也、板本和仁、田浦保穂、早崎。第 46 回山口県獣医学会、2007/8/18.
- 188 腹腔内腫瘍に随伴して腫大した腰窩リンパ節摘出を行った犬の 2 症例。林 一旗、宇根 智、野田史子、原口友也、板本和仁、田浦保穂、中市統三、早崎。第 46 回山口県獣医学会、2007/8/18.
- 189 犬の水頭症に対して実施した V-P シャント術の効果と合併症。宇根 智、野田史子、板本和仁、中市統三、田浦保穂、早崎。第 46 回山口県獣医学会、2007/8/18.
- 190 Inhibitory efficacy on mosquito-feeding and experimental infection of *Dirofilaria immitis* by administration of topical Imidacloprid-Permethrin compound in dogs. Hayasaki, M. and SAEKI, H. The 21st International Conference of the World Association for Advancement of Veterinary Parasitology(WAAVP2007, Gent, Belgium), p406, 2007/8/19-24.
- 191 ベルギー、ゲント市で開催された第 21 回世界獣医寄生虫学会（WAAVP2007）にみる獣医寄生虫学研究の最新動向」。早崎。第 17 回獣医臨床寄生虫学研究会、目黒寄生虫館、2007/12/01
- 192 草木類などを用いた駆虫剤開発の試行—最新トピックスの紹介—。早崎。第 168 回日仏生物学会（京都市、キャンパスプラザ京都会議室）、2007/12/08.
- 193 駆虫剤抵抗性を獲得した家畜の消化管寄生虫（線虫類）に対する草木類の駆除効果。早崎。臨床研究会（山口県産業動物獣医師勉強会）、萩市北部地区家畜診療所研修室。2007/12/14.
- 194 北海道に蔓延している致死的な人獣共通寄生虫病、エキノコックス症について。早崎。山口大学動物医療センター症例検討会、2007/12/17.

195 犬糸状虫ミクロフィラリアのサーカディアンリズムー明暗サイクルの影響。早崎。大
146 回日本獣医学会学術集会（宮崎大学担当、ワールドコンベンションセンタ
ー〈シーガイヤ〉）。2008/9/24-26.

196 世界の獣医大学。早崎。山口大学家畜病院臨床検討会（山口大学農学部第1講義室）。
2008,12/16。

文芸

1 早崎峯夫(2006): 「武者小路実篤先生との41年ぶりの再会」、武者小路実篤講演録
「人生について」、調布市武者小路実篤記念館(登録番号・刊行物番号 2005-288).

その他、執筆

1 早崎峯夫(2006): 等しからずを憂える。山口県獣医師会会報、535号。

2 早崎峯夫(2006): 先人に学ぶ。山口県獣医師会会報、536号。

講演

1 早崎峯夫(1976): 腹水および胸水を主訴とする犬糸状虫症の病態生理および治療方針
決定のための診断。全国合同小動物臨床研究会、横浜。

2 早崎峯夫(1988): 寄生虫と免疫。比較臨床血液研究会、1、24-28。第1回研究会記念講
演。

3 早崎峯夫(1989): ここまで分かってきた免疫防御機構。第10回小動物臨床研究会年次
大会卒後教育セミナー集、45-59。

4 早崎峯夫(1989): 免疫性皮膚疾患の病態と治療について。第10回小動物臨床研究会年次
大会（パネルディスカッションテキスト集、287-296）。

5 早崎峯夫(1990): 犬糸状虫感染診断のための簡易抗体・抗原検査キットの評価について。
第4回日本小動物臨床病理研究会（セミナーテキスト集、33-38）。

6 早崎峯夫(1992): アレルギー性皮膚炎の診断と治療。第22回日本小動物獣医師会年次大
会（講演テキスト集、108-111）。

7 早崎峯夫(1992): 「アレルギー性皮膚炎の診断と治療」。第22回日小獣年次大会講演
集、108-111。2月実施。

8 早崎峯夫(1993): 「犬糸状虫感染に対するジエチルカルバマジンとイベルメクチンの
使用」。長崎大学熱帯医学研究所研究集会報告書（1993）、8-12。

9 早崎峯夫(1993): 「抗糸状虫剤ジエチルカルバマジンの作用機序」。長崎大学熱帯
医学研究所研究集会報告書（1993）、28-33。

10 早崎峯夫(1993): 犬のアレルギー。第16回浦舟皮膚科セミナー、横浜市立大学医学部
付属浦舟病院皮膚科主催。横浜。

- 11 早崎峯夫(1995): 教育講演、「犬糸状虫の治療」。平成6年度日本獣医師大会(日本小動物獣医学会)、東京。
- 12 Hayasaki, M.(1995):Special speaker: Control of Heartworm in dogs. Symposium "Advancement of Parasite Control", The 25th World Veterinary Congress(WVC,Yokohama1995), Yokohama.
- 13 早崎峯夫(1997): シンポジスト、「ホームドクターと大学病院との関わり」、シンポジウム「21世紀の獣医医療」ーその社会性を求めてー。シンポジスト:全5名。平成9年度関東地区獣医師大会、東京ビッグサイト国際会議場。
- 14 早崎峯夫(1998): 講演、「犬糸状虫の新しいとらえかた」。第22回日本比較臨床血液学会(高崎)、6月1日実施。
- 15 早崎峯夫(1999): 講演、「犬猫のアレルギー性皮膚炎」。東京都練馬支部学術講演会、2月1日実施。
- 16 早崎峯夫(2000): 犬糸状虫の生態学、ワークショップ「寄生虫と生態学の新たな連携」(講演45分)。第69回日本寄生虫学会大会(島根医科大学、県民会館)
- 17 早崎峯夫(2002): 講演、「高齢動物のヘルスマネジメント」第4回ヒトと動物を考える公開セミナーー動物とのよりよい関係を目指してー(講演1時間)。主催(社)日本愛玩動物協会、共催愛媛県愛玩動物飼養管理士会(リジェール松山ゴールドホール)、松山市。1月26日実施。
- 18 早崎峯夫(2003):ペットのエキノコックス感染。第26回日仏獣医学会例会(講演30分)。(財)日仏会館、7月25日。
- 19 早崎峯夫(2003):犬糸状虫の生き残り戦略。第62回寄生虫分類形態談話会(講演1時間)。目黒寄生虫館。11月1日。
- 20 早崎峯夫(2003): 犬糸状虫の生き残り戦略。麻布大学講演会(1時間)。麻布大学。11月2日。
- 21 早崎峯夫(2003): エキノコックス症。第9回獣医臨床寄生虫学談話会(講演1時間)。目黒寄生虫館。12月13日。
- 22 早崎峯夫(2004): 犬糸状虫の生き残り戦略。第1回日本獣医内科学アカデミー総会、東京(都市センターホール)、8月7-8日。
- 23 早崎峯夫(2004): 猫の犬糸状虫症。第139回日本獣医学会学術集会(3/29-31、理化学研究所、和光市)、獣医寄生虫学会シンポジウムシンポジスト講演(1時間)、第139回日本獣医学会学術集会講演要旨集、113頁。
- 24 早崎峯夫(2005): 犬糸状虫の生き残り戦略。山口大学獣医学セミナー。2005,1/26。
- 25 早崎峯夫(2005): ネコの犬糸状虫症。第139回日本獣医学会学術集会(理化学研究所、埼玉・和光市), 2005/3.
- 26 HAYASAKI M.(2007): 講演、Control of canine heartworm infection,山口大学大学院連合獣医学研究科獣医学共通ゼミナール,連合大学4大学大学院学生約60名

参加、ホテルセントコア（大会議場）（山口市湯田温泉）、2006/07/04.

- 27 佐伯英治、早崎峯夫(2007): 犬におけるイミダクロプリド・ペルメトリン合剤（フォートレオン™）の蚊の吸血抑制効果。第4回日本獣医内科学アカデミー学術大会、東京、京王プラザ、2007/8/11.
- 28 早崎峯夫(2007): 猫の犬糸状虫感染適応性と犬糸状虫症。第4回日本獣医内科学アカデミー学術大会、東京、京王プラザ、2007/8/11.
- 29 早崎峯夫(2008): 教育講演「私の犬糸状虫研究の歴史」。第19回獣医臨床寄生虫研究会、目黒寄生虫館、目黒区、2008/12/06.

マスコミ対応(取材、執筆、講演、出演など)

- 1 大家 裕(順天堂大・寄生虫学・教授、日本寄生虫学会会長)、小林昭夫(東京宇慈恵会医科大・寄生虫学・教授)、早崎峯夫(1988): 執筆、「ペットから移る寄生虫病」。週間「女性セブン」9月29日号、226~227.
- 2 早崎峯夫(1992): 取材、「犬にもアトピーが」。朝日新聞姫路支局、朝日新聞姫路版夕刊(9月22日)。
- 3 早崎峯夫(1993): 出演、「犬のアトピー」。毎日放送報道局社会部。毎日放送テレビ報道番組「MBS ナウ」(6時のニュース)にて放送(3月)。
- 4 早崎峯夫(1993): 出演、「犬のアトピー」。TBS テレビ報道番組「ニュースの森」(6時のニュース)にて放送(3月)。
- 5 早崎峯夫(1993): 取材「東京農工大のランク急上昇」(獣医学科の女子合格者の急増について取材)、週刊朝日3月19日号、134-135。
- 6 早崎峯夫(1995): 相談取材、「動物をテーマとした学校教育放送の企画の相談」、NHK教育テレビ番組製作スタッフからの相談。
- 7 早崎峯夫(1995): 相談取材、「農業、環境、畜産に関する企画の相談」、NHK山形放送局放送センタースタッフからの相談。
- 8 早崎峯夫(1995): 出演、NHK教育テレビ番組「日曜ソリトン」(動物との暮らしに関する討論番組、東京農工大学獣医学科学生8名出演)、NHK(渋谷)ホールスタジオにて収録。12月3日23-24時放送。
- 9 早崎峯夫(1996): 取材「炭疽菌について専門家インタビューの相談」(TBSテレビ報道局より。オウム事件に関連して電話取材を受け、本菌を解説し家畜衛生試験場の専門研究官を紹介した。翌朝の報道番組「TBS モーニングアイ」にて放送)。
- 10 早崎峯夫(1996): 講演、「犬の栄養学」。NHK文化センター(青山)講座。東京。
- 11 早崎峯夫、他(1997): 共同執筆、「犬と楽しく暮らそう」。NHK出版、NHK教育テレビ番組「趣味悠々」テキスト本、139頁。NHK教育テレビ番組「趣味悠々」にて放送。
- 12 早崎峯夫(1996): 共同執筆、「幸せになる犬との暮らし」。(株)ベネッセコーポレーション

ョン 209 頁。

- 13 早崎峯夫(1997): 取材、「動物のアレルギー」。山陽新聞社会部。
- 14 早崎峯夫(2000): 犬のアレルギー。出演、テレビ山口 (TYS)、TYS ニュース番組「TYS ナウ」(午後 6:30-7:00) (2 月 29 日放送)。
- 15 早崎峯夫(2003): 共同執筆、改訂「幸せになる犬との暮らし」。幻冬舎、東京、216 頁
- 16 早崎峯夫(2004): 取材、「鶏インフルエンザについて」。NHK 山口支局、1 月 21 日記者来訪。
- 17 早崎峯夫(2004): 動物介在ケア — 思いやり社会創造の一環 —。読売新聞東京本社版、コラム「論点」、2 月 26 日朝刊、12 版 13 面。
- 18 早崎峯夫(2005): 出演、山口朝日放送(YAB)、ニュース番組「ステーション Y」午後 6:15-6:54)、「犬の花粉症」(2 月 8 日放送)。
- 19 早崎峯夫(2004): 新潟中越地震「ペットにも PTSD 症状?」(インタビュー)、毎日新聞東京本社版、11 月 15 日朝刊、14 版 28 面。
- 20 早崎峯夫(2005): 「動物が教えてくれる相互信頼」— 新たな情操教育創造の一環 —。読売新聞西部本社版 (山口・下関・周南版)、11 月 25 日朝刊、12 版 30 面。
- 21 早崎峯夫(2007): 「動物介在情操教育のすすめ」— 山口大学農学部教授 早崎峯夫氏に聞く —、人と人との相互信頼を築くために。読売新聞西部本社版 (山口県全域版)、10 月 27 日朝刊 12 版 25 面。
- 22 早崎峯夫(2008): 動物のいる暮らし。平成 20 年度山陽小野田市しあわせ学級記念文集。山陽小野田市教育委員会

検定教科書執筆 (分担)

- 1 早崎峯夫(1994): 東京書籍: 小学 3 理科、中学 1 理科。
- 2 早崎峯夫(1997): 東京書籍: 小学 3 理科。
- 3 早崎峯夫(1998): 東京書籍: 小学 3 理科。
- 4 早崎峯夫(1999): 東京書籍: 小学 3 理科。

学会・研究会・勉強会の運営、活動企画、開催など

山口大学における学会の企画、開催(開催責任者として)

- 2000 講演「92 年ぶりに発生した口蹄疫について」白井淳資博士(農水省動物衛生研究所上席研究官、本学卒)、大学会館大ホール、12 月 21 日開催。
- 2001 講演「獣医臨床病理、— 基礎と臨床のはざ間で —」長谷川篤彦博士(東京大学名誉教授、日本大学教授)、大学会館 2 階会議室、4 月 25 日開催。
- 2002 平成 14 年度山口大学公開講座「動物のいる楽しい暮らし、— ちょっと専門的な動物のお話 —」全 3 回(毎週 1 回)。

第 1 話：動物の高齢化社会—心の友、伴侶動物と楽しく年取る知恵

講師早崎峯夫(農学部教授)

第 2 話：動物園の近未来像、講師成島悦雄(東京都恩賜上野動物園)

第 3 話：山口大学の獣医学教育と山口大学獣医学科、講師白水完治(農学部助手)

山口市、ぱるるプラザ公会堂、8 月 17、24、31 日開催。

2002 講演企画協力、第 12 回(平成 14 年度)山口市民大学講座「大人も楽しめる動物園を目指して」、講師成島悦雄(東京都恩賜上野動物園)、山口市民会館大ホール、主催：山口市教育委員会、8 月 26 日開催。

2004 企画開催責任者として。「第 162 回日仏生物学会」、参加者約 30 名、発表演題 11 題、大学会館 2 階会議室、12 月 11 日開催。

2000—2003 家畜病院臨床検討会の運営責任者として、年平均 10 回、4 年間で約 30 回の同検討会を開催し、また症例発表も分担した。

学界における学会の運営、企画、開催

1989—2006 日仏獣医学会の設立と総務幹事(事務局長)として運営を担ってきた。学术交流実績は後述のごとく。

1989—現在 日仏生物学会幹事として、学会管理運営の一翼を担ってきた。

1998—現在 獣医臨床寄生虫学談話会の代表世話人(2005)として、また 2005 からは幹事として同研究会を改設し、年 2 回の研究例会の開催と会の運営を担ってきた。会員約 50 名。

2003—2006 日本獣医寄生虫学会誌の編集委員長として、学会機関誌の創刊、運営、編集・刊行業務を担った。

2005 日本獣医寄生虫学会チュートリアルセミナー講演の企画、招へい、開催実施。「寄生虫症と神経疾患」(講師、西村謙一、佐賀大学)、第 139 回日本獣医学会学術集会(2004/3/29-31)、理化学研究所、和光市。

地域貢献活動

- 1 早崎峯夫、他 2 名(1993): 講演、東京農工大学家畜病院セミナー「犬と猫の健康(病気、食餌、しつけ)」、府中市、府中保健所共催、(東京農工大学 4-32 教室)。
- 2 早崎峯夫、他 2 名(1994): 講演・実技、「犬の正しい飼い方教室」、府中市、府中保健所共催、(府中市民会館)。
- 3 早崎峯夫(1999): 講演、「犬の病気などについて」。平成 10 年度「犬の飼い方教室」(府中市・東京都府中小金井保健所共催)、東京都府中小金井保健所講堂。
- 4 早崎峯夫(1997): 講演「犬と猫の栄養学」。東京農工大学公開講座「現代社会における人と動物の絆」、全 15 回シリーズ。東京農工大学農学部 4-32 講義室、

講演者全 15 名。11 月 1 日開催日担当。

- 5 早崎峯夫、山下千恵(1998): 学術発表「今、犬猫たちは本当に幸せなのでしょうか」、東京農工大学科学技術展'98。東京農工大学農学部本一21 講義室、11 月 1 日開催。
- 6 早崎峯夫(1998): 講演会「動物の福祉について考える」。東京農工大学平成 10 年度学園祭参加学術講演会(早崎峯夫主催、講演者藤本晋平、小暮規夫、山口千津子)。東京農工大学農学部視聴覚教室、11 月 1 日開催。
- 7 早崎峯夫(2004): 働く犬たちー補助犬ー。(山口大学企画 出前講義)。県立宇部高校(宇部市)、2 年生 40 名、6 月 23 日午後 1 時 05 分～3 時 50 分。
- 8 早崎峯夫(2004): 働く犬たちー補助犬ー。(山口大学企画 出前講義)。私立高水高校(岩国市)、2 年生 40 名、10 月 2 日午後 1 時～2 時。
- 9 早崎峯夫(2005): 働く犬たちー補助犬ー。(山口大学企画 出前講義)。県立防府高校(防府市)、2 年生 20 名、2 月 17 日午後 1 時 30 分～2 時 30 分。
- 10 早崎峯夫(2007): 働く犬たちー補助犬ー。(山口大学企画 出前講義)。私立高知高校(高知市)、2 年生 25 名、6 月 18 日午後 10 時 00 分～11 時 00 分。
- 10 早崎峯夫(2007): 働く犬たちー補助犬ー。(山口大学企画 出前講義)。県立宇部高校(宇部市)、2 年生 40 名、6 月 18 日午後 2 時 00 分～3 時 30 分。
- 11 早崎峯夫(2008): 働く犬たちー補助犬ー。(依頼講演、県立宇部西高校(宇部市)独自企画)。1・2 年生全員 320 名、3 月 12 日午前 10 時 00 分～12 時 00 分。
- 12 早崎峯夫(2008): アニマルセラピーについて。(依頼講演、山陽小野田市「しあわせ学級」企画。山陽小野田市教育委員会主催。山陽小野田市市民館、参加市民 60 名、12 月 12 日午前 9 時 30 分～11 時 00 分。

書評・論説

- 1 早崎峯夫(2001): 論説、自己評価点検委員会からの提言「研究活動と連携した蔵書の構成」、山口大学附属図書館自己点検・評価報告書 41-42 頁。
- 2 早崎峯夫(2002): 書評、「犬の気持ち、飼い主の疑問」(小暮規夫著、講談社、230 頁)、日本獣医師会雑誌、55(1)、63。
- 3 早崎峯夫(2002): 祝辞、「日本獣医寄生虫学会誌の創刊号の発刊に際して」、日本獣医寄生虫学会誌創刊号(12 月 31 日発刊)、3-4 頁。
- 4 早崎峯夫(2003): 書評、「エキゾチックアニマルの薬用量マニュアル」(成島悦雄監訳、インターズー社、600 頁)。
- 5 早崎峯夫(2006): 書評、「ペットドクトル太平記」(小林利夫著、文芸社、214 頁)、日本獣医師会雑誌、59(11)、724。

国際会議での講演、口演など

- 1 第 10 回世界獣医寄生虫学会(Perth, Australia)(1983)、早崎、口演。
- 2 第 6 回国際寄生虫学会(Brisbane, Australia)(1986)、早崎、口演。
- 3 第 6 回国際免疫学会(Ottawa, Canada)(1986)、Cebren、早崎ら、口演。
- 4 第 23 回世界獣医学会(Montreal, Canada)(1987)、早崎、口演。
- 5 第 7 回アジア獣医師会大会(Pattaya, Thailand)(1990)、早崎ら、口演 2 題。
- 6 第 1 回日仏獣医セミナー(Lyon 獣医大学, France)(1990)、早崎、口演。
- 7 第 14 回世界獣医寄生虫学会大会(Cambridge, UK)(1993)、早崎ら、口演。
- 8 第 14 回世界獣医寄生虫学会大会(Cambridge, UK)(1993)、
早崎；総会における次期大会会長招待スピーチ
- 9 第 1 回国際猫の犬糸状虫症研究会 (San Francisco、ホテルリッツ、
参加国；米、加、豪、伊、日 (早崎、招待講演) (1994)。
- 10 動物の寄生虫ワクチンと免疫学のシンポジウム
(Fort Collins, Colorado, USA、早崎、招待参加)(1995)。
- 11 第 15 回世界獣医寄生虫学会(横浜)(1995)、早崎、口演。
- 12 第 25 回世界獣医学会議(横浜)(1995)、早崎、招待講演。
- 13 第 3 回日仏獣医セミナー(Alfort 獣医大学, Paris, France) (1996)、早崎、口演。
- 14 第 4 回日仏獣医セミナー(Alfort 獣医大学, Paris, France) (1997)、早崎、口演。
- 15 第 16 回世界獣医寄生虫学会(Sun city, 南アフリカ)(1997)、早崎、口演。
- 16 第 26 回世界獣医学会議(Lyon 国際会議場, France)(1999)、早崎、口演。
- 17 第 6 回日仏獣医セミナー (nice, フランス、2001)、早崎、口演。
- 18 第 18 回世界獣医寄生虫学会 (Stresa, イタリア) (2002)、早崎、示説。
- 19 第 20 回世界獣医寄生虫学会 (Christchurch, ニュージーランド) (2005)、
早崎、示説。
- 20 国立アルフォール (パリ) 獣医大学(大学記念講堂) (2004/09/14)、早崎。
- 21 リヨン獣医大学 (学長会議室) (2004/09/16)、早崎。
- 22 ツールーズ獣医大学 (教授会会議室) (2004/09/17)、早崎。
- 23 第 21 回世界獣医寄生虫学会 (gent, ベルギー) (2007)、早崎、佐伯、示説。

文献の読める外国語

英語、仏語、独語。

国際交流活動

日仏獣医学学术交流

一日仏獣医学会の創設に中心的役割を果たし、仏獣医学界に働きかけ、日仏獣医学会の設立を促し、設立に資した。日仏獣医学会は 1989 年創立、会員数約 130

人、研究会開催、年 2 回、日仏獣学会誌発行年 2 号。

ー日仏獣医学会の創設と学術交流活動の運営(事務局) (1989- 2005)。

ー日仏獣医学術交流講演会の開催(フランス人講演者の招へい延べ 20 人)、日仏獣
医セミナー東京大会の開催 15 回、同フランス大会の開催 (参加) 4 回

ーフランス医学アカデミー視察(2002)。

Ch. PILET 前会長 (元 アルフォール獣医大学学長) の招聘によりフランス医
学アカデミーを訪問、日仏獣医学学術交流について会談。

ーフランス国立獣医大学招請訪問(2004/9/13-24) 。

講演：「日仏獣医学学術交流の歴史と将来」。

アルフォール獣医大学 (JP コタール学長、講演：大学記念講堂にて)

リヨン獣医大学 (G. ブールドワゾ学長、講演：会議室にて)

ツールーズ獣医大学 (デノワイエ学長、講演：教授会室にて)。

韓国学術交流

ー韓国獣医大学。研究所学術訪問 (2008/10/26-29)

国立畜産科学院 (京畿道水原市、受け入れ柳一善主任研究官)、ソウル大学校獣
医校 (京畿道ソウル市、受け入れ李仁炯助教授)、忠南大学校獣医校 (忠清南道
大田市、受け入れ宋根鍋助教授)

研究者などの招へい、講演会の開催

1990 第 1 回日仏獣医学セミナーの企画・開催(フランス国立 Lyon 獣医大学)。

1991 Ch. ピレ博士(免疫・微生物学)、フランス国立 Alfort 獣医大学教授(元学長)、
招へい講演会(東京、(財)日仏会館)。

1991 J-P. レイノー博士(薬理学)、フランス・ローヌ・メリュー社 Toulouse 研
究所部長。招へい講演会(日本ローヌ・メリュー社会議室)。

1991 B. クレルク博士(眼科学)、フランス国立 Lyon 獣医大学助教授。招へい講
演会(東京、(財)日仏会館)。

1992 J. ビュッシエラス博士(寄生虫学)、Alfort 獣医大学教授。招へい講演会(東
京、(財)日仏会館)。

1992 R. ウォルター博士(栄養学)、Alfort 獣医大学教授。招へい講演会(東京、(財)
日仏会館)。

1992 ナント獣医大学 3 年生 2 名の短期研修受け入れ(日本滞在、2 週間)。

1994 B. ショメル博士(疫学)、California 大学獣医学部助教授、招へい講演会(東
京、(財)日仏会館)。

1994 M. ラプラ博士(内科学)、Lyon 獣医大学教授 (学長)。招へい講演会(東京、
(財)日仏会館および東京農工大学にて講演)。

- 1994 P-J. コンサルビ博士(薬理学)、フランス・ローヌ・メリュー社 Toulouse 研究所開発部主任研究員。招へい講演会(日本ローヌ・メリュー社会議室)。
- 1995 C.A. ローリングス博士(臨床寄生虫学)、Georgia 大学獣医学部教授。招へい講演会(日本ローヌ・メリュー社会議室)。
- 1995 第2回日仏獣医セミナーの企画・開催(東京、(財)日仏会館)
- 1995 B.ハート博士・L.ハート博士(動物行動学)、California 大学獣医学部動物行動学研究所所長。招へい講演会(東京農工大学農学部講義棟 41 教室)
- 1996 第3回日仏獣医セミナーの企画・開催(Alfort 獣医大学)
- 1997 A-L. パロディ博士(内科学)、Alfort 獣医大学教授
(学長)。招へい講演会(東京、(財)日仏会館)。
- 1997 P. デラトゥール博士(毒性学)、Lyon 獣医大学教授
(学長代行)。招へい講演会(東京、(財)日仏会館)。
- 1997 第4回日仏獣医セミナーの企画・開催(Alfort 獣医大学)。
- 1998 Ch. ピレ博士(免疫学)、Alfort 獣医大学教授
(元学長、現フランス医学アカデミー会長)。招へい講演会企画・開催(東京、獣医臨床病理学会共催)。
- 2000 第5回日仏獣医セミナーの企画・開催(財・日仏会館、東京)
招聘者：ピレ教授、コタール教授、シェルメット教授(以上、アルフォール獣医大学)、ケック教授(リヨン獣医大学)、ドルシー教授(ツールーズ獣医大学)。
- 2000 JP コタール教授(獣医内科学)、アルフォール獣医大学副学長。招聘講演会の企画・開催(東京、獣医臨床病理学会共催)。
- 2002 日仏国際プリオン病会議(日仏獣医学会、日仏医学会、日仏生物学会共催、(財)日仏会館、日本獣医師会後援、
開催主体：日仏獣医学会、11月23日(財)日仏会館大ホールにて開催。
仏側招待研究者：J.ブルジュール・ピク教授(免疫学、アルフォール獣医大学)
J.オー教授(神経内科学、パリIV大学(医科大学))
日本側招待研究者：山内一也博士(東大名誉教授)
水澤英洋教授(神経内科学、東京医科歯科大学)
記録：日仏獣医学会誌第13巻(日仏国際プリオン病会議特集号)、1-57頁)
- 2003 日仏国際感染症講演会(主催：日仏会館、パストゥール研究所支援協会、共催：日仏生物学会、日仏医学会、日仏獣医学会、日仏薬学会、日仏経済交流会、11月1日(財)日仏会館大ホールにて開催。
主題：「境界なき感染症！病気は時間・空間・種の壁を越えて」。
仏側招待研究者：MH タハ博士(パストゥール研究所)
日本側招待研究者：山内一也博士(東大名誉教授)

学会などにおける活動・役職

日本獣医学会会員(1969- 現在)、評議員(1980- 現在)
日本寄生虫学会会員(1970- 現在)、評議員(1984- 現在)
日本獣医師会会員(1969- 現在)
日本獣医師会雑誌編集委員 (1990-1993)、同委員長 (1994-1996)
日本小動物獣医学会理事 (1994-1996)、同監事 (1997-1998)
日仏獣医学会総務幹事(事務局)(1989- 2005)
獣医臨床寄生虫学談話会代表世話人 (1998- 2005)、同研究会 (改設) 幹事 (2005-現在)
第 15 回世界獣医寄生虫学会 (横浜 1995) 大会会長
第 25 回世界獣医学会議 (横浜 1995) 寄生虫病分科会プログラム委員長
日本学術会議第 15 期会員推薦管理会獣医学研究連絡委員会委員(1993-1995)
日本学術会議第 16 期会員推薦管理会獣医学研究連絡委員会委員(1996-1998)
東京都獣医師会 獣医事委員会委員 (1996-1998)
東京都獣医師会 学術委員会委員 (1998-1999)
山口県獣医師会 学術委員会委員(2000- 現在)
日本獣医寄生虫学会編集委員長(2002- 2006)
日本比較臨床医学会理事(2003- 現在)
第 162 回日仏生物学会大会会長 (山口大学、2004/12/11)、演題 11 題、参加者約 30 名
山口県農業共済組合、家畜共済指定獣医師 (2005-現在)
山口県獣医師会役員推薦委員会 委員長 (2005)

援助を受けた研究費

1975 年 科研費 奨励 A
1976 年 科研費 一般 D
1977 年 科研費 奨励 A
1978 年 科研費 奨励 A
1981 年 科研費 一般 C (分担)
1982 年 東京農工大学後援会研究奨励費
1989 年 科研費 一般 C (代表)
1994 年 科研費 試験研究 B(1) (分担)
1995 年 科研費 試験研究 B(1) (分担)
1996 年 科研費 試験研究 B(1) (分担)
2000 年 委任経理金 メリアル・ジャパン社
2001 年 委任経理金 (1) メリアル・ジャパン社
2001 年 委任経理金 (2) メリアル・ジャパン社

2006年「外用イ・ペ剤の蚊の吸血阻止効果1」バイエル・メディカル社
2006年「外用イ・ペ剤の蚊の吸血阻止効果2」バイエル・メディカル社

職域における重要な役職

東京農工大学

東京農工大学農学部附属家畜病院長
教務委員(2期)、
厚生補導委員、
予算施設委員
広報委員、
図書委員(府中分館)、
学術報告編集委員
入試情報委員会(副委員長・委員長)
第2次学力試験委員

山口大学

附属図書館運営委員会委員・資料選定委員会委員長(2000-2001)
農学部学務委員(2001-2002)
教務専門委員会委員(全学委員会2001-2002)
情報環境整備専門員会施設設備運用部会各地区部会委員会委員(全学委員会2001-2002)
獣医学科図書委員(2005-2006)
総合図書館・農学部委員(2007-2008)